原の辻遺跡出土
「長宣子孫」銘内行花文鏡

令和３年度　東アジア国際シンポジウム

光り輝く青銅器を求めて

原の辻遺跡出土新資料
馬形青銅製品
（壱岐市教育委員会提供）

－原の辻遺跡出土青銅器から見た東アジア交流－

長崎県埋蔵文化財センター

ごあいさつ

国特別史跡である原の辻遺跡は、「魏志倭人伝」に記載されている「一支国」の国邑であり、これまでの調査で朝鮮半島や中国との対外交流を物語る多くの遺構や遺物が確認されています。長崎県教育委員会が原の辻遺跡の発掘調査を本格的に実施しはじめたのは平成７年度からであり、継続した調査を行うことで遺跡の範囲が約 100ha に広がり、その中心には多重の環濠がめぐる大規模な集落があったことがわかりました。出土遺物においても中国や韓国から伝来した土器や金属器などが数多く出土しており、「魏志倭人伝」に記された南北に市糴（してき）する様子を物語っています。

その交易品の一つして青銅器があります。原の辻遺跡から出土する青銅器には、朝鮮半島由来の多鈕細文鏡（たちゅうさいもんきょう）や細形銅剣（ほそがたどうけん）をはじめ、朝鮮半島北部の楽浪郡を経由してもたらされたと思われる戦国式銅剣や遼東系銅釧（りょうとうけいどうくしろ）など、中国との関係をあらわす遺物が多数見られます。また、半両銭や五銖銭（ごしゅせん）といった中国銭貨や青銅製の権も見つかっており、弥生時代中期から後期にわたり活発に交易が行われていたことがわかります。近年では、壱岐市教育委員会の発掘調査で馬の形をした青銅製品が出土し注目を集めました。

今回のシンポジウムではこうした青銅器を中心に、「光り輝く青銅器を求めて－原の辻遺跡出土青銅器にみた東アジア交流－」というテーマで、国内はもとより中国や朝鮮半島の青銅器について第一線で調査研究されております、福岡大学研究特任教授・名誉教授および春日市奴国の丘歴史資料館名誉館長の武末純一先生と九州大学准教授辻田淳一郎先生、また、釜山博物館福泉分館の職員で韓国の青銅器について詳しい学芸研究士の洪性栗（ホン・ソンユル）先生にオンラインにてご参加いただき、御講演並びにパネルディスカッションを行います。どうぞ御期待ください。

結びにあたり、講師をお引き受けいただいた先生方をはじめ、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、今回のシンポジウムを契機として、日本と韓国との文化交流がますます深まりますことを祈念いたしまして、御挨拶といたします。

令和３年１０月１６日

長崎県埋蔵文化財センター所長

寺　田　　正　剛

目　次

巻頭カラー ……01 頁

青銅器から何がわかるか？
福岡大学名誉教授・春日市奴国の丘歴史資料館名誉館長　武末　純一 …03 頁

鏡からみた弥生時代の交流—原の辻遺跡出土鏡から考える—
九州大学准教授　　辻田　淳一郎 ……12 頁

韓半島出土馬形青銅装飾に関する検討
釜山博物館福泉分館学芸研究士　　洪　性栗 ……19 頁

原の辻遺跡芦辺高原地区出土　馬形青銅製品について
長崎県埋蔵文化財センター主任文化財保護主事　　白石　渓冴 ……22 頁

講師プロフィール

1-1

1-2

1-3

1 原の辻遺跡出土新資料：馬形青銅製品（壱岐市教育委員会所蔵）

2 原の辻遺跡出土青銅器（壱岐市教育委員会所蔵）

3-1：恵比須山遺跡

3-2：タカマツノダン遺跡

3-3：シゲノダン遺跡（レプリカ）

3 対馬出土青銅器（対馬市教育委員会所蔵）

4-1

4-3

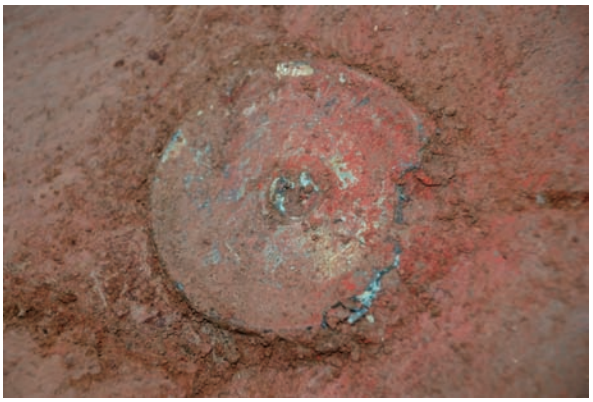
4-2

4-4

4 伝良洞里遺跡出土把頭飾（福泉博物館所蔵；洪性栗氏撮影）

5-1:1 号甕棺墓検出状況

5-2: 中国鏡検出状況



5-3: 中国鏡検出状況（近景）

5 原の辻遺跡芦辺高原地区隣接地 1 号甕棺墓（写真提供 壱岐市教育委員会）

青銅器から何がわかるか？

福岡大学名誉教授
春日市奴国の丘歴史資料館名誉館長
武末　純一

Ⅰ　青銅器とは

青銅器は銅に錫と鉛を加えた合金である。錫は硬化剤、鉛は増量剤で、多くは金色に輝く。ほとんどは鋳型で鋳造し、鉄器に比べて錆びても形がわかりやすい。

Ⅱ　何がわかる？

1．型式分類して相対年代が分かり、時間軸ができる
　石器類よりも耐久性が優れた利器ができるが、鉄器には劣る
　→石器時代・青銅器時代・鉄器時代

2．銘文が記された例などから暦年代が分かる
　弥生時代では中国鏡が代表的で、遼寧式銅剣や細形銅剣なども中国の例との比較で設定される

3．容易くは作れず、原料を得るのに手間がかかり、一般的に貴重品（時に威信財となる）だから、首長層の摘出と展開過程が追えるし、国の形成と展開がわかる（細形青銅武器類や完形中国鏡）

4．製作には様々な施設や道具が必要で、製作の際の生成物もあるため、それらの遺物から鋳造技術を明らかにし、製作した場所（工房）や工人集団を特定できる
　鋳型、中子、炉、建物、坩堝・取瓶、原料（銅塊・錫塊・鉛塊）、銅滓、送風管、刀子、砥石など

5．青銅器に残る製作痕跡や文様の違い、製作関係遺物の地域的差異などから流派を解明できる

6．青銅器は鋳型で作るから形態的差異が明瞭で、同笵・同型関係が把握でき、生産地からの流通の様相や交流・交易関係を解明できる

7．鉛同位体の比率から原料の産地が分かる

8．重さを計り成分分析をすれば、どのくらいの原料を必要とするかが分かる

9．人骨に嵌入した青銅武器片は戦闘の存在を示す

10．祭器化した青銅器はしばしば埋納され、埋納状況や分布からマツリの階層性を解明でき、取り扱い方や出土状況を分析すれば青銅器の階層性もわかる
　家のマツリ　村のマツリ　　国や国々のマツリ

11．転用品から本来の青銅器の形態を復元して、ライフヒストリーから人との関りを探れる

12．中国銭貨のあり方などから海村を摘出して、交易の実態に迫れる

13．装飾品研究や車馬具研究の一環を担う

今回は原の辻遺跡から出た青銅器を素材に、3 と 12 を主に述べる。

Ⅲ　国の成立と展開

単位地域の中での階層構造の在り方は、そこでの国の形成度に連動し、逆に国形成の進展度の目安になる。なかでも墓地の様相や青銅器の保有相は、階層構造を敏感に反映する。

細形青銅武器や多鈕細文鏡は韓半島では日常の生活域から完形品は出ず、多くは少数の墓の副葬品である。とくに北韓の平壌市貞栢洞１号墓では「夫租蔵君（夫租という地域の濊族の政治的首長）」と刻んだ銀印に銅剣と銅矛が伴うから、青銅武器は首長層の権威を示す政治的な聖なる器物であった。この取り扱いは北部九州でもそのまま再現されたから、当然その性格もそのまま引き継がれ、古朝鮮の権威を示す器物であった。

福岡市の早良平野は弥生時代前半期新段階（前期末～中期前半）の青銅器類の分布が明らかで、吉武遺跡に集中する。吉武遺跡の下には野方、有田、飯倉、東入部など銅剣や銅戈が１～２本で銅矛や多鈕細文鏡はもてない拠点遺跡（岸田遺跡は吉武とこれらの中間）、さらにその下に青銅器をもてない小集落という階層構造がみられ、国という政治組織ができた。また、吉武遺跡の内部にも、青銅器を多く持つ高木地区、青銅器は多いが墓のつくりが高木地区よりも小さくて群集墓から抜け出せない大石地区、その下に副葬品をもたない小墓地群という階層構造が形成された。

原の辻遺跡では中期前半に２条の環溝が台地の裾を楕円形に巡って約 24 万㎡を囲み、大原地区では前半期新段階の細形青銅器類が破片も含めて多く出て、集中保有（多鈕細文鏡 1、細形銅戈 1、細形銅剣 5 以上）するから、この時期に一支国ができ、原の辻が国邑になった。

この時期の国邑が持つ青銅器の質と量は大同小異で優劣の差が認められないから、国という政治組織は一斉にでき、相互に実力の差はない。多くの国々が林立して『漢書』に百余国と記された体制は、この時期までさかのぼる。また、佐賀平野でつくられ三条の節帯を持つ銅矛は、玄界灘沿岸地帯に分布するから、この時期には国々の連合体（初期筑紫政権）も形成され始めた。

中期後半から後期には首長層の聖なる器物が、漢王朝の権威を示す完形中国鏡に切り替わり、初期筑紫政権では伊都国と奴国が頂点に立って、この二国に完形中国鏡が集中する。原の辻遺跡の首長層の墓域も、完形中国鏡が集中する大川地区に変わる。

Ⅳ　海村と楽浪交易・三韓交易

弥生時代には、海と山が一体化していた縄文世界に農村が割って入り、漁村と山村に分かれる。しかも漁村の中からは、海上交易活動を主体とする海村もあらわれた。海村の典型例は福岡県糸島市御床松原遺跡で、隣接する新町遺跡も含めて一つの村である。弥生時代から古墳時代の石錘が異常に多く、鉄製の釣針やアワビおこしもあり、網漁の比重が高くて、潜水漁法も行う。石庖丁の数量（12 点）は、同時期の竪穴住居の数が同様でしかも農村である佐賀県鳥栖市安永田遺跡の石庖丁の数量（63 点）のおよそ 5 分の 1 で、農作業の比率もその程度であった。したがって、御床松原遺跡のように周囲の遺跡よりも漁撈具の比率が高くて海上交易品が出る沿岸部の漁村は、海村と見てよい。

これらの海村は原の辻遺跡を除けば国邑よりもはるかに小さいが、農村であまり出ない中国・韓国系の遺物（板状鉄斧、原料鉄・鉄素材、三韓土器、楽浪土器、中国銭貨など）が出土する。漁村が、東アジア世界の交易網に組み込まれて海村となったのである。

楽浪土器は北部九州に集中し、1 遺跡に 1 ～ 2 点程度で対馬に多い対馬型、3 点以上だが遺跡全体に散漫に分布する原の辻型、遺跡内の一区画に集中する番上型の三つに分かれる。対馬型では三韓土器が圧倒的に多く、韓半島南部との日常的な三韓交易を示して、対外交渉の基層をなす。原の辻型は対馬以外の北部九州の海村の特徴で、海村世界での交易は対外交渉の中層をなす。原の辻遺跡が典型例で、全体的に散漫に分布し器種が豊富で楽浪交易を示す。ただし、原の辻遺跡では三韓土器の量も多く、三韓交易と楽浪交易はここで本格的に合流する。番上型の三雲・井原遺跡番上地区ではⅡ―5 区土器溜から、88 ㎡の調査区で数十点ほどの楽浪土器片が出た。実際の個体数は 15 点前後だが、この一帯に集中して、その外の地区ではほとんど出ない。国邑の中央部での楽浪人の居住と、対外交渉の頂点を示す。

半両銭、五銖銭、貨泉などの中国銭貨は、海村の生活域から 4 点以上が出る。ほかに海辺の岡山県高塚遺跡で貨泉 25 点、大阪府亀井遺跡で貨泉 4 点が知られた。国邑級の集落では、完形中国鏡の場合と異なり、中国銭貨をほとんど保有しない。海村の中国銭貨は生活域から出て生業に関わるから、海上交易活動での対価に用いられた。

はかりのおもりには棹秤権と天秤権の 2 者があり、どちらも弥生時代に存在した。原の辻で出た青銅製の棹秤権は、弥生時代後期に属する可能性が高い。権は海村だけでなく、拠点集落での計量にも使用され、須玖遺跡群では青銅器の鋳造の際に用いられたが、交易の場での使用頻度が高いと考える。

弥生時代後半期の対外交渉は、3 層を成して進行した。原の辻遺跡はその中で、国邑であり海村でもあるという特異な様相を見せて青銅器も多様で、海村交易世界の大きな結節点であった。

【引用参考文献】

岡崎敬 1968「『夫租蔵君』銀印をめぐる諸問題」『朝鮮学報』46
下條信行 1989「弥生社会の形成」『古代史復元 4』講談社
武末純一 2002「弥生文化と朝鮮半島の初期農耕文化」『古代を考える　稲・金属・戦争―弥生―』吉川弘文館
武末純一 2003「弥生時代の年代」『考古学と暦年代』ミネルヴァ書房
武末純一 2018「対外交渉における文字使用」『伊都国人と文字』糸島市教育委員会
武末純一 2020「弥生時代日韓交渉をめぐるいくつかの問題―総論に代えて―」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告書　論考編）』
長崎県教育委員会 1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 16 集

【図表出典一覧】

図 1：長崎県埋蔵文化財センター作成 / 図 2 ～ 5・図 9 ～ 14・表 1：武末 2002・2003・2018・2020 より作成 / 図 6：岡崎 1968 より作成 / 図 7：下條 1989 より作成 / 図 8：長崎県 1999 より作成

図１　原の辻遺跡の青銅器出土および表採地点（銅鏃を除く）

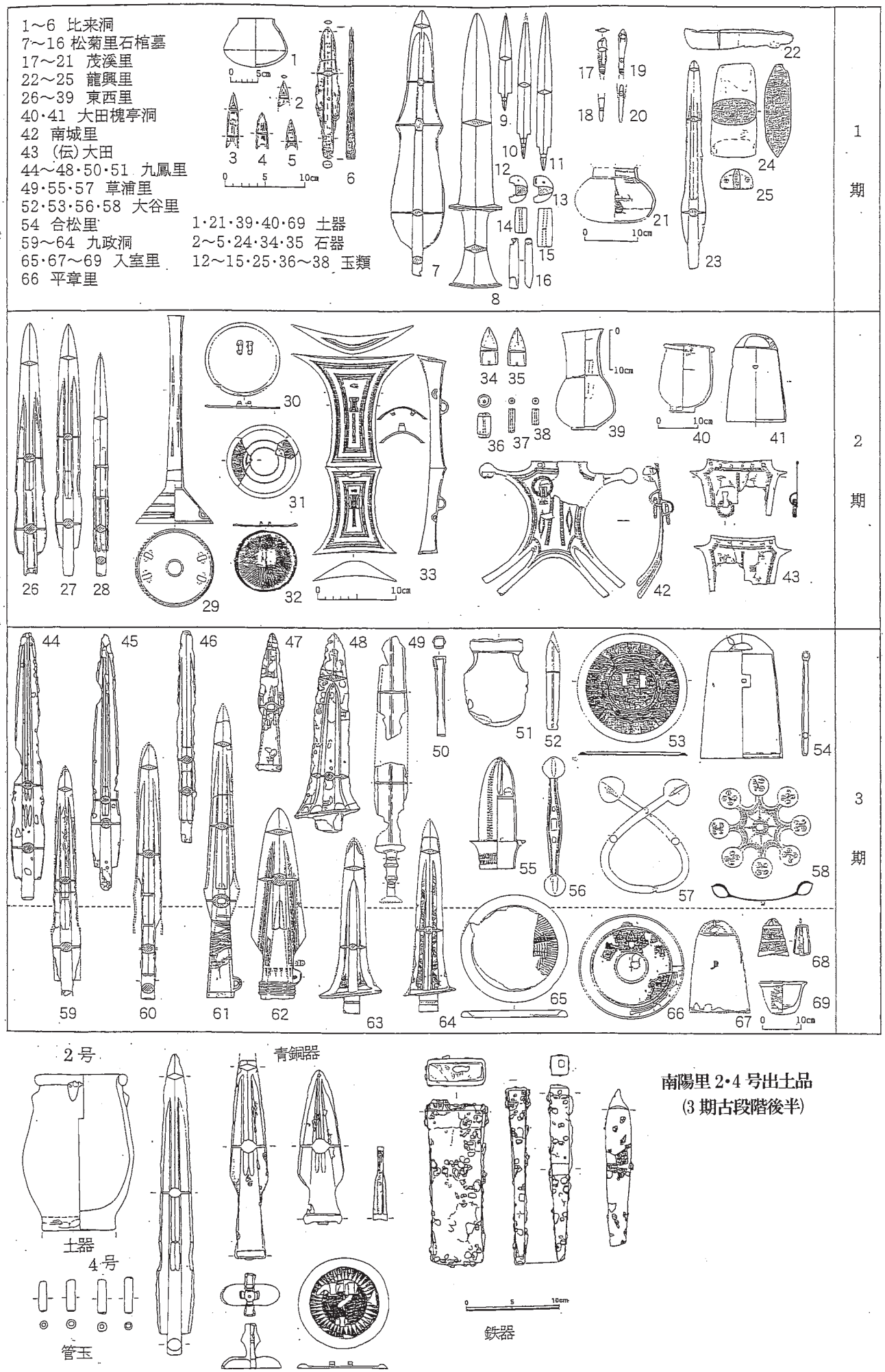
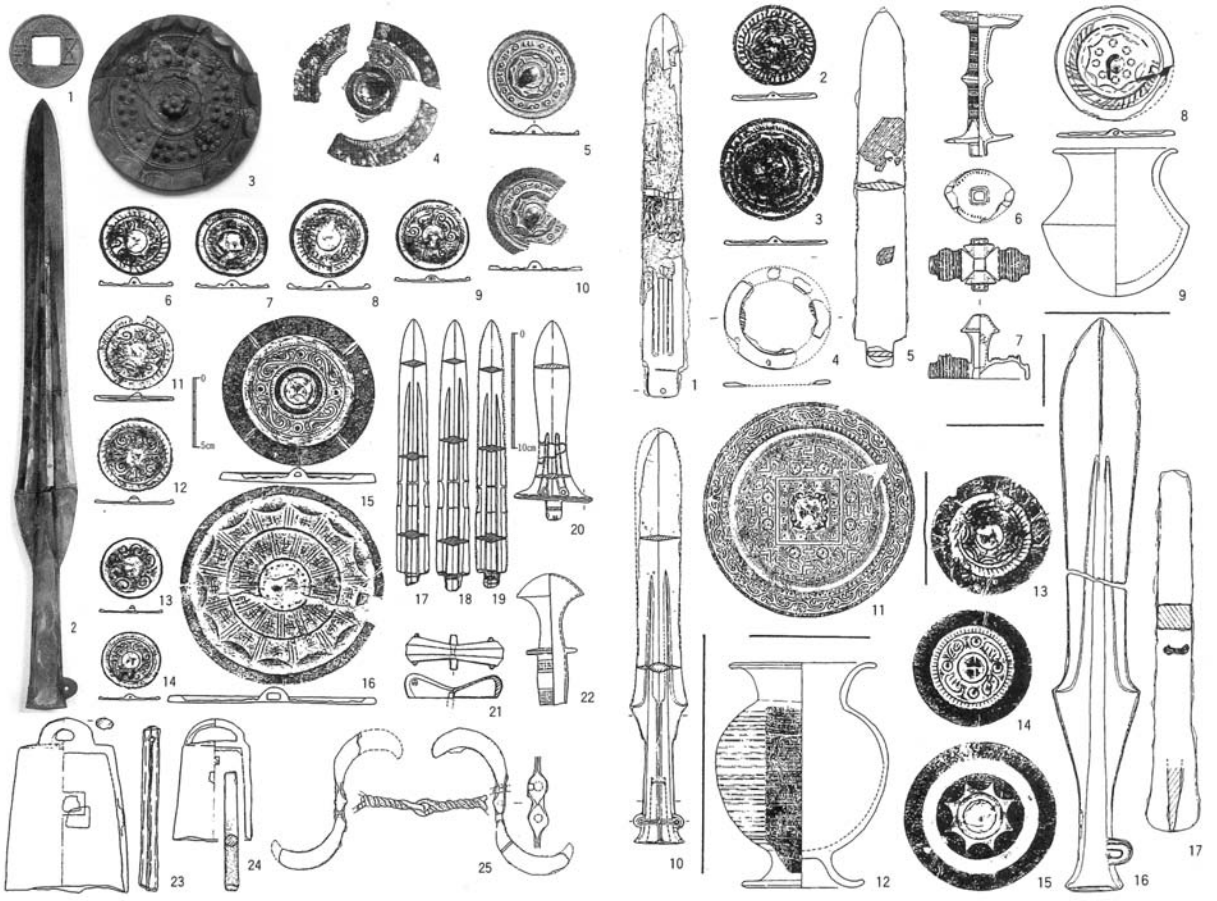


図 2　韓半島南部の青銅器編年（1 ～ 3 期）



（1～3　茶戸里1号墓　4～10　漁隱洞　11～25　坪里洞）
（3～5，10，15　中国鏡，6～9，11～14，16　韓鏡）
（4期）

（1～4　良洞里（東）427号　5～9　良洞里（東）55号墓　10，11　良洞里　12～15　良洞里（東）162号墓　16，17　良洞里（東）200号墓）（9，12は土器　5，17は鉄器　ほかは青銅器）
（5期）

図3 韓半島南部の青銅器編年（4・5期）

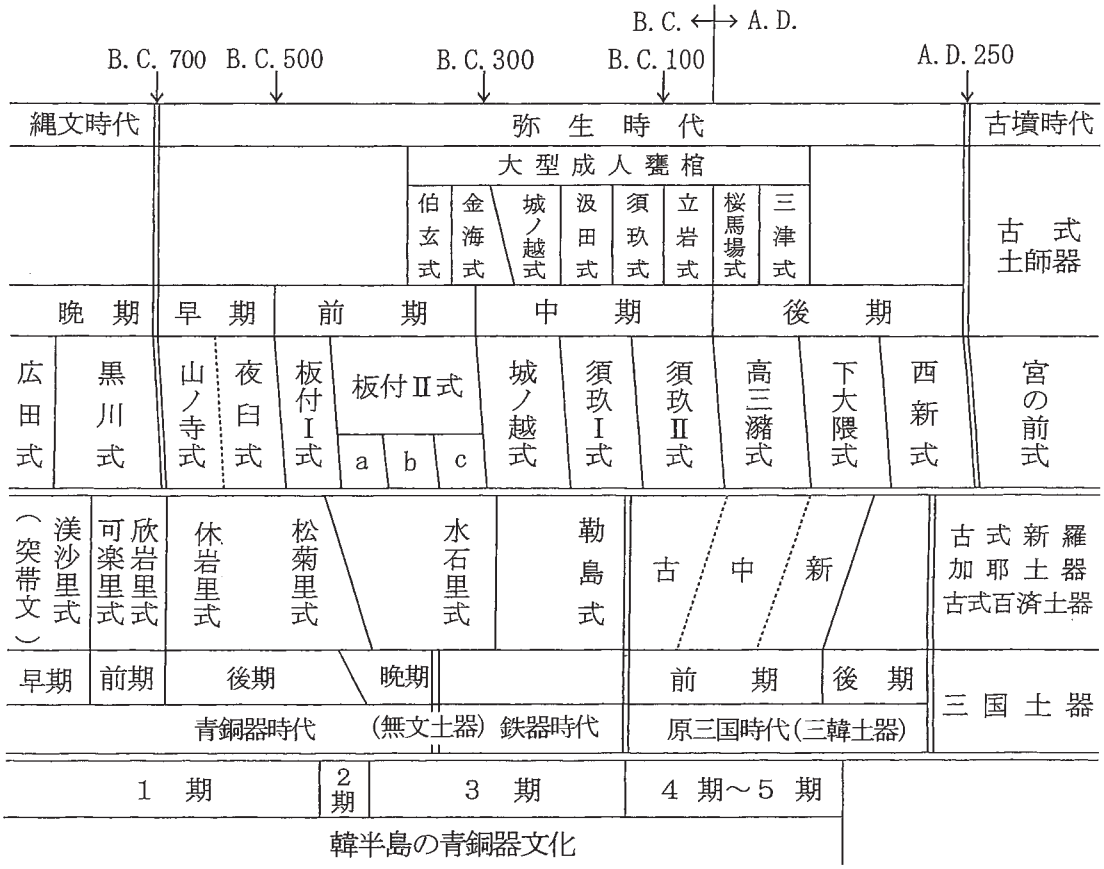


表1　北部九州の弥生土器と韓半島南部の無文土器・三韓土器の併行関係

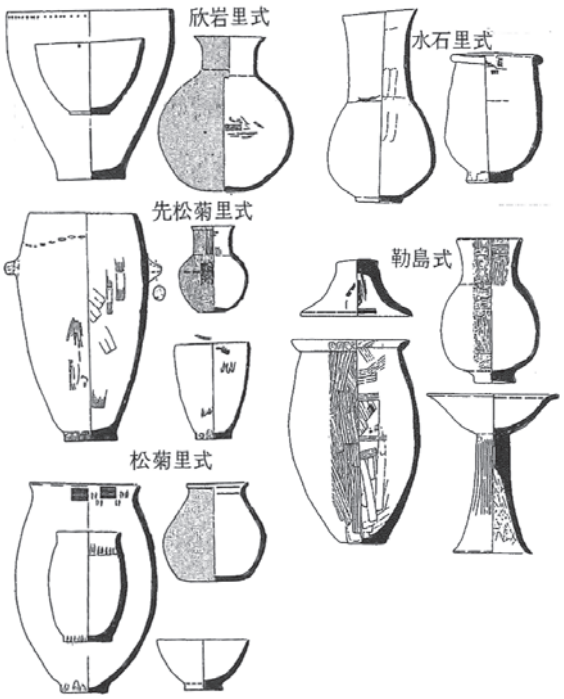
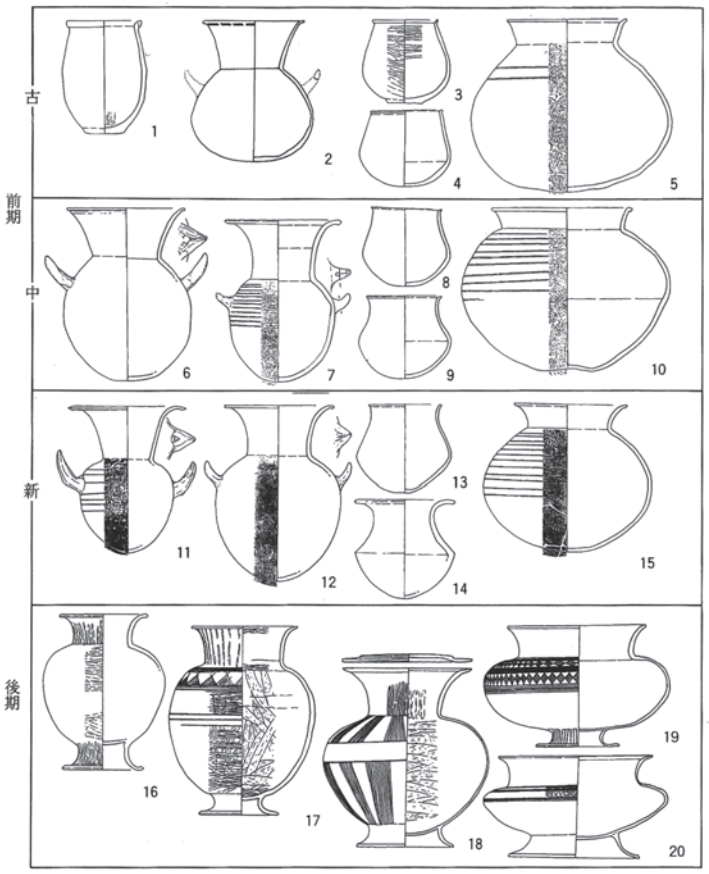


図４　韓半島東南部の無文土器（縮尺不一）



1，3　茶戸里34号墓　7，9，10　茶戸里31号墓　17　下垈43号墓　2　朝陽洞38号墓
11,14,15　茶戸里64号墓　18,20　下垈23号墓　4，5　茶戸里35号里　12,13　茶戸里70号墓
19　下垈44号墓　6，8　茶戸里47号墓　16　玉城里115号墓

図５　韓半島東南部の三韓土器

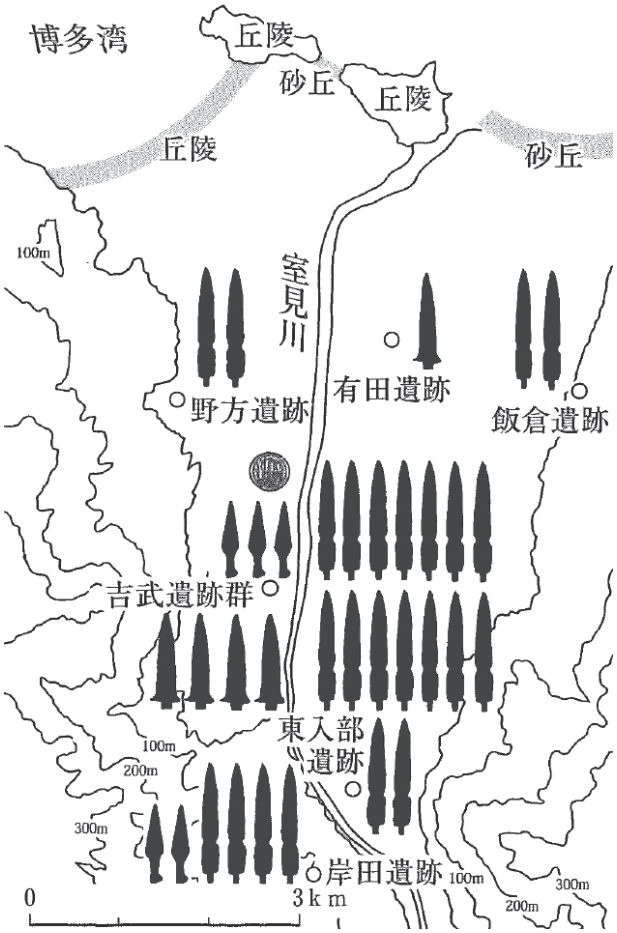


図７　早良平野の青銅器（前期末～中期前半）

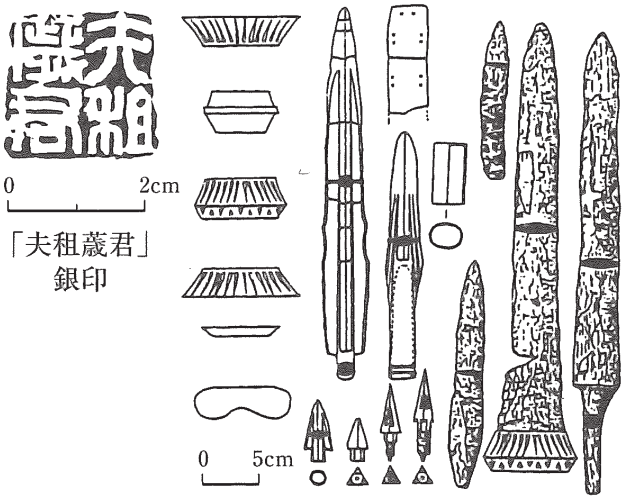


図６　貞栢洞１号墓出土遺物

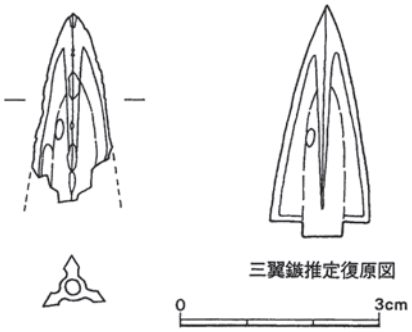


図８　原の辻遺跡の三翼銅鏃

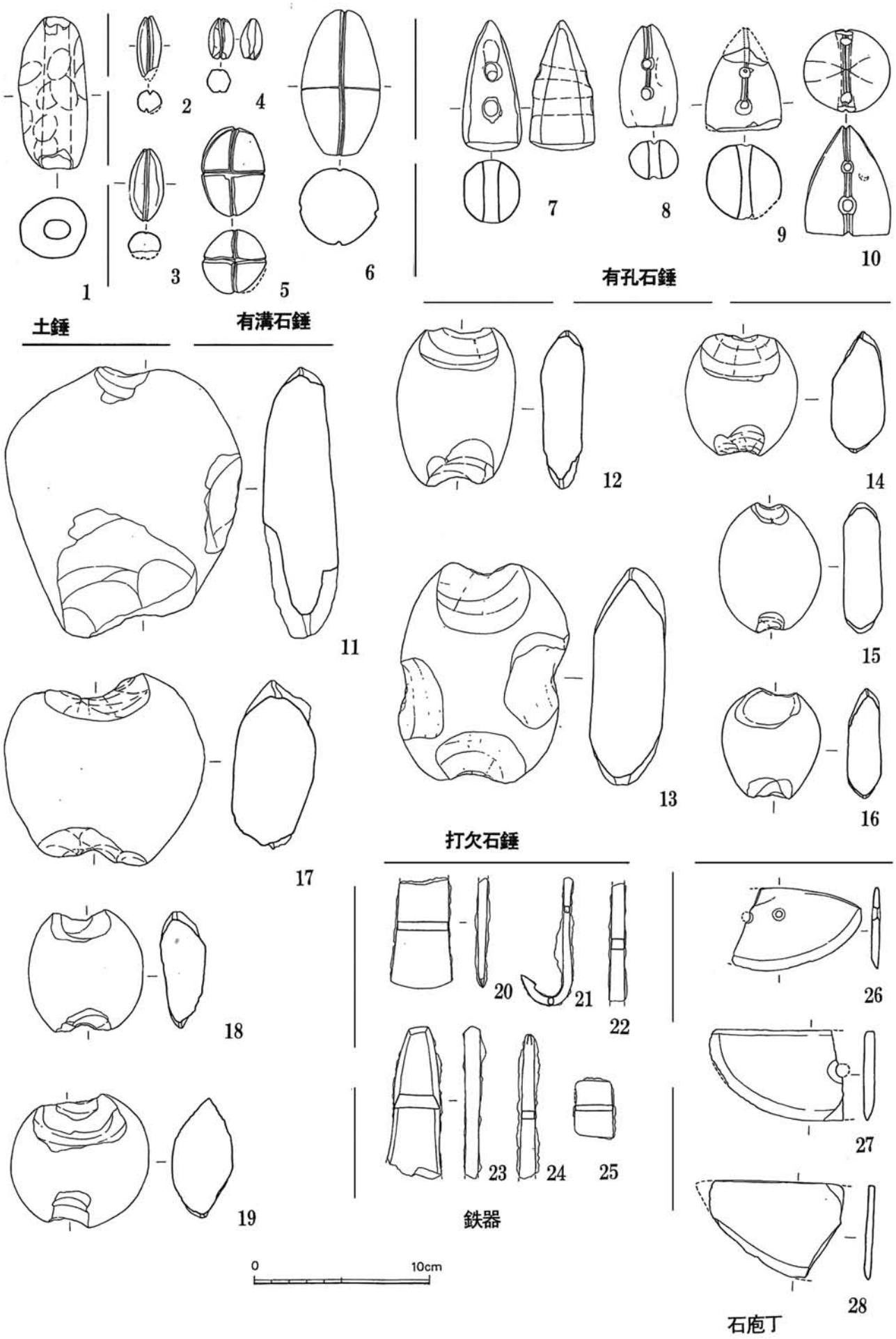


図 9　御床松原遺跡出土遺物

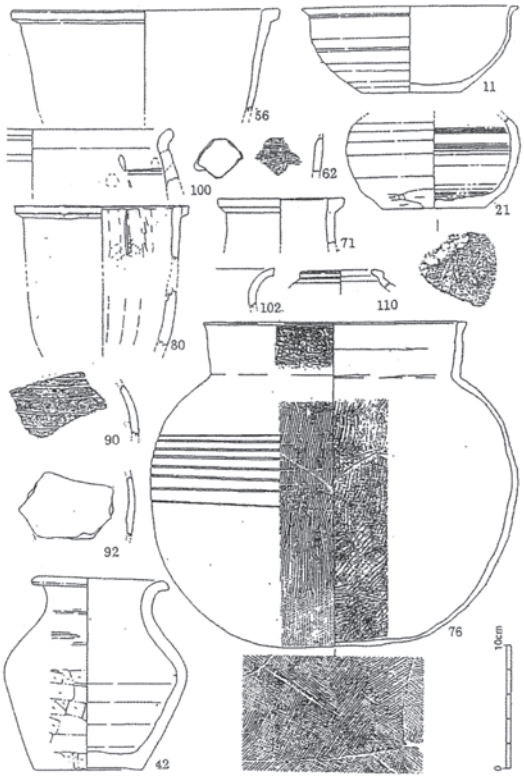


図 10　原の辻遺跡の楽浪土器

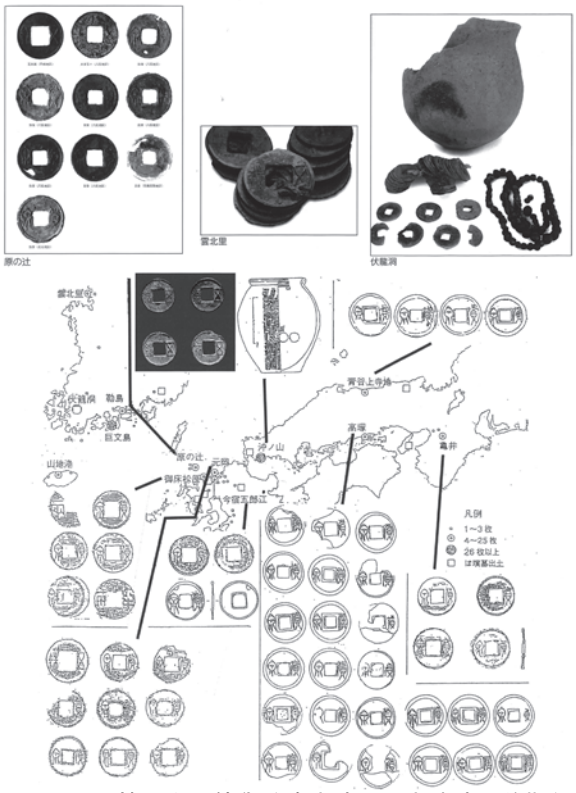


図 11　日韓の中国銭貨（弥生時代～古墳時代前期）

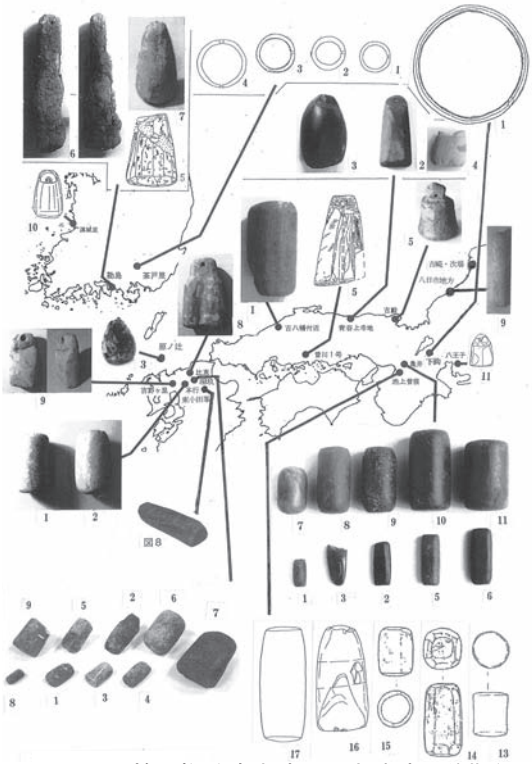


図 12　日韓の権（弥生時代～古墳時代前期）

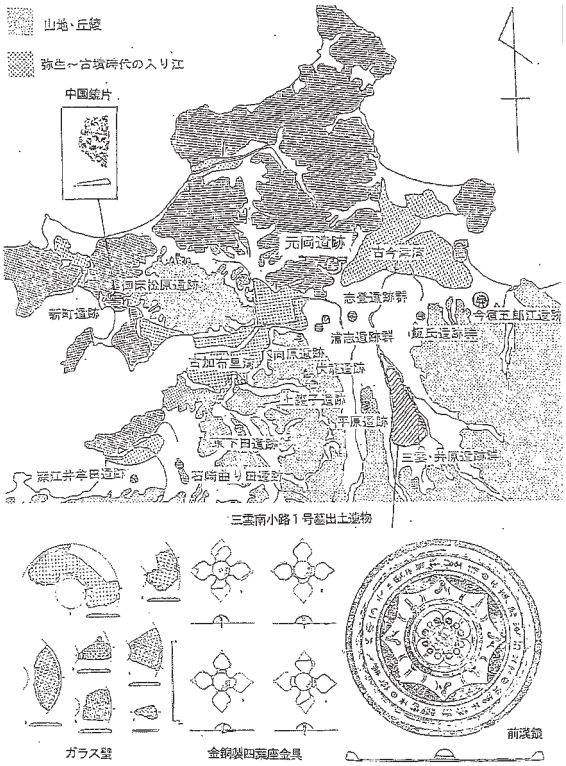


図 13　伊都国の国邑と海村

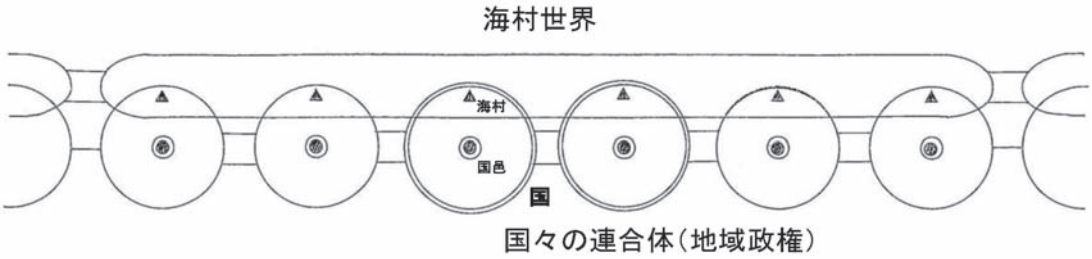


図 14　海村と国邑の関係模式図

鏡からみた弥生時代の交流 ―原の辻遺跡出土鏡から考える―

九州大学准教授
辻田　淳一郎

1. はじめに

弥生時代・古墳時代の日本列島の遺跡からは、約 6 千面の金属製の鏡が出土していることが知られている。このうち、鉄製の鏡が 10 面ほど知られるが、それ以外は青銅製の鏡である。ここではこの青銅鏡を指して鏡と呼称する。列島から出土する弥生・古墳時代の鏡は製作された場所によって、大きく［朝鮮半島製の鏡］、［中国製の鏡］（中国鏡）、［日本列島製の鏡］（倭製鏡）に区分されている。

これらのうち、中国鏡は、前漢鏡・後漢鏡・三国鏡・西晋鏡などのように、製作された時代・王朝によって区分されている。倭製鏡は、弥生時代と古墳時代それぞれにおいて別の種類のものが製作されている。このうち、弥生時代の遺跡から出土するのは、朝鮮半島製の多鈕細文鏡と、中国鏡（前漢鏡・後漢鏡・三国鏡の一部）、倭製鏡（いわゆる弥生時代小形仿製鏡）である。

これらの鏡は、日本列島の外部からもたらされたという点で、東アジアの地域相互の交流を示す貴重な資料であり、また列島では各地の上位層の副葬品として墓地から出土する場合が多いことから、社会の階層化や政治的統合を考える上でも重要である。弥生時代の鏡から東アジアの交流史を考える上では、以下のような視点が挙げられる。

①その鏡はいつ頃製作され、その後どのくらいの時間を経て流通し、最終的に廃棄・副葬されたか
②その鏡はどこで製作され、どのような経路で流通したか

①は鏡の「時間」をめぐる側面であり、②は鏡の「空間」をめぐる側面である。①は特に中国鏡の場合、製作された年代と、使用された後に遺跡で廃棄されるまでの年代の間に百年以上の開きがある場合が少なくなく、その間の経緯をどのように説明するかという点が問われる場合がある。また②について考えた場合、朝鮮半島製の多鈕細文鏡にしても、各時期の中国鏡にしても、日本列島の外部からもたらされ、その後列島の各地に広がっていった点で、北部九州および壱岐・対馬は、その地理的環境という点からも、対外交流の窓口として重要な役割を果たしていたことは間違いない。弥生時代においては、鏡の分布の中心は一貫して北部九州にある。その中で、弥生時代の後期後半以降になると、西日本から東海にかけて中国鏡の分布範囲が拡大していることから、鏡を求める人びとの移動と交流が活発に行われたことが想定される。そこにおいて、朝鮮半島や大陸により近い位置にある壱岐の原の辻遺跡からも多くの鏡が出土している点が注目される。原の辻遺跡はこれまでも海域交流の結節点という観点から議論されているが、本発表では鏡の種類とその特徴という観点から、壱岐の人びとが東アジアの交流史において果たした役割という点について考えてみたい。

2. 原の辻遺跡から出土した鏡の概要と特徴

(1) 弥生時代における鏡の時期的変遷

ここではまず、弥生時代各時期の鏡の変遷について、時代背景とともに整理したい。

弥生時代前期末～中期前半（紀元前3～2世紀頃） 朝鮮半島で製作された多鈕細文鏡がもたらされ、列島各地に流通する。金属製の鏡が初めて列島で出現した時期である。多鈕細文鏡は12面の出土例が知られる。原の辻遺跡からも破片ながら1点の出土例がある。

弥生時代中期後半（紀元前1世紀頃） 前漢の武帝が紀元前108年に朝鮮半島西北部（現在の平壌付近）に楽浪郡を設置した後、楽浪郡を経由して中国系の文物が日本列島にもたらされるようになる。この時期は特に福岡県糸島市三雲南小路遺跡や同春日市須玖岡本遺跡のように、30面前後の前漢鏡を副葬する厚葬墓が出現し、北部九州ではこの両地域を核として政治的な統合が進んだものと考えられている。

弥生時代後期前半（紀元後1世紀頃） 中国では前漢から新・後漢へと王朝が交代する中で政治的に不安定となり、一時的に鏡などの大陸系文物の流入が減少したものと考えられている。この時期、弥生時代小形仿製鏡と呼ばれる倭製鏡が出現し、一部は朝鮮半島南部の漁隠洞遺跡などでも出土している。福岡市志賀島出土の「漢委奴国王」金印（57年か）の存在から、1世紀でも後半以降には中国への遣使が再開したものと想定され、中国鏡の舶載も再開したものと考えられる。

弥生時代後期後半（紀元後2世紀頃） 後期中頃を前後して、中国鏡の出土例が増加する。唐津平野、糸島地域、福岡平野、佐賀平野が鏡の分布が集中する地域であるが、この時期にはさらに東九州から瀬戸内以東へと分布が拡大する。この時期に流入した中国鏡の代表例として、方格規矩四神鏡・内行花文鏡・細線式獣帯鏡などがある。この時期の鏡の特徴として、①完形鏡の破砕副葬、②破鏡の拡散、③弥生時代小形仿製鏡の拡散の3点が挙げられる。

①は、中国鏡を墓に副葬する際に、打ち割った状態で破片として副葬する埋葬行為で、この時期から古墳時代前期にかけて西日本から東海・北陸にかけて広がっていった。北部九州で始まったものとみられ、中国鏡の東方への拡散とともに使用方法として広がったものと考えられる。

②は、主に中国鏡の内区片や外区片などの破片について、破断面を研磨したり穿孔を施すなど、破片として使用したことを示すもので、九州から東日本まで広く出土例が知られている。朝鮮半島では前漢鏡の破片を円形に加工したものが知られるが、内・外区片に穿孔を施したり破断面を研磨したものは列島に特徴的なものである。破鏡の出現については、a：完形鏡を故意に割って分割した、b：破砕副葬の中から破片を抜き出した、c：元来破片の状態で列島に流入した、という3つの可能性があるが、破鏡同士で接合する事例が殆ど知られていないことから、cのように元来破片の状態で列島にもたらされたものの比重が高かったものと考えられる。

③は、弥生時代小形仿製鏡の生産・流通の拡大であるが、北部九州ではこの時期福岡県

春日市の須玖遺跡群周辺で広形銅矛や小形仿製鏡の生産が集中的に行われ、ここから各地に拡散した。またこの時期には近畿でも小形仿製鏡の生産が行われ、それぞれに流通したものと考えられている。

このように、後期中頃以降、中国鏡の流入再開に伴い、各種の鏡の流通が活発に行われた。最大の特徴は、中国鏡の分布域の大幅な拡大であり、西日本から東日本にかけて、北部九州を経由して大陸系の文物を受容する動きが活発化したものと考えられる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭（紀元後 2 世紀末～ 3 世紀中頃） 弥生時代終末期になると、中国東北部を支配していた公孫氏が楽浪郡の南側に新たに帯方郡を設置し（204 年）、この帯方郡が朝鮮半島南部および列島との交流の窓口となっていったものと考えられている。大陸では黄巾の乱（184 年）以後、政治的に大きく混乱する。後漢王朝は 220 年に滅亡し、以後三国時代となる。弥生時代終末期はまさにこの後漢末期から三国時代の前半期に並行しており、数は多くないものの、後漢末～三国初期の中国鏡が流入している。これらは北部九州から瀬戸内周辺にかけて分布している。この時期に列島に出現した中国鏡として、双頭龍文鏡、飛禽鏡、上方作系浮彫式獣帯鏡、画象鏡、画文帯神獣鏡などがある。いずれもこの時期の列島では完形鏡としての出土は少なく、破砕副葬もしくは破鏡としての出土例が大半を占める。この後、古墳時代になると分布が近畿地域中心となり、各地で築造される古墳の副葬品として、完形で副葬される事例が主体となる。このことから、古墳時代初頭前後を境にして中国鏡の流入・流通形態が近畿地域を窓口とする形へと急速に転換したものと考えられる。またこの転換と、「原の辻＝三雲貿易」から「博多湾貿易」（久住 2007）へと移り変わる時期がおおよそ重なっており、原の辻遺跡やカラカミ遺跡など、壱岐の諸遺跡で遺構数が急速に減少することが連動しているものと考えられる。いわば、時代の転換を反映したものと考えられる。

（2）原の辻遺跡から出土した各時期の鏡の特徴

原の辻遺跡では、後述する破鏡も含めて全体で 15 面（点）前後の鏡が出土している。表採品が多く含まれるなど、出土状況が不明確なものが多い一方で、複数の地点に分散するとはいえ、特定個人墓への副葬品としてではない形で、全体として一連の遺跡から集中して出土しているという点では、比較的多い事例であるともいえる。このうち多鈕細文鏡が 1 面、弥生時代小形仿製鏡（倭製鏡）が 2 面（図 1-2・14）であり、それ以外は全て中国鏡である。中国鏡は、本来完形もしくは破砕副葬と想定されるものが 5 面分（図 1-1・4・15, 図 2-30・31。図 1-6 と図 2-30 は同一個体）で、それ以外は破鏡もしくは鏡片としての出土である。また上にみたような時期的な変遷のうち、中期前半・中期後半に属する鏡は、他の同時期の遺物とともに石田大原地区と呼ばれる集落中心部の東側で出土している（図 1-13 の多鈕細文鏡、2-31 の異体字銘帯鏡など）。これらは原の辻遺跡の中期前後の様相を示す点で重要であるが、本発表では特に弥生時代後期以降の資料に注目して検討を行いたい。

弥生時代後期前半（紀元後 1 世紀頃）　この時期は、前述のように中国王朝の交代期と重なり、一時的に中国鏡の流入が減少した可能性が想定される。また原の辻遺跡でも自然災害などによる一時的な集落の衰退が想定されている（長崎県教育委員会 2016）。この時期以降、墓域はこの時期石田大原地区からさらに東の大川地区へと変遷しており、この中で後漢鏡が副葬されたものと考えられる。

弥生時代後期後半（紀元後 2 世紀頃）　後漢鏡や弥生時代小形仿製鏡が集中するのがこの前後の時期である。原の辻遺跡から出土した中国鏡で目立つのが、面径 20cm 前後の四葉座内行花文鏡 2 面である。図 2-30 は石田大原地区の整地層から出土したもので、東側の大川地区から流れ込んだものである可能性が想定されている。図 1-1 は集落の南側に位置する原ノ久保 A 地区の 9 号土坑（本来は 12 号箱式石棺墓の副葬品か）から出土している。大型の内行花文鏡は、北部九州から西日本各地で比較的上位の墓に副葬される事例が多く、原の辻遺跡の例もそうした脈略で理解できる。また破鏡も含め、中国鏡の鏡背面にはベンガラとみられる赤色顔料を塗布する事例が多いことが共通点として挙げられる。図 1-4 は大川地区で出土した後漢代の方格規矩鏡である。表採品ながら、大川地区では箱式石棺墓が検出されており、そこに副葬されていた鏡の一部である可能性がある。また破断面の一部に摩滅がみられることから、破砕副葬もしくは元来破片の状態で副葬された可能性などが想定される。また弥生時代小形仿製鏡 2 面はいずれも内行花文が二重弧線で描かれるもので、図 1-2 が原ノ久保 A 地区 8 号箱式石棺墓から、1-14 が西側低地部の河道際から出土している。この前後の時期に福岡平野（須玖丘陵周辺）で製作され、原の辻遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭（紀元後 2 世紀末～ 3 世紀中頃）　この時期の遺構から出土する鏡で特徴的なのは、後漢末～三国初期の中国鏡の存在である。図 1-5 と 12 は、同一個体ではないが、いずれも上方作系浮彫式獣帯鏡の破鏡である。前者は原ノ久保墓域から、後者は遺跡北部の古墳時代前期の溝から出土している。図 1-3 も斜縁を持つ小型鏡の破鏡であるが、後漢末～三国初期の斜縁鏡群の可能性が高い。また 2019 年に壱岐市教育委員会の調査により集落北東低地部の C-1 区で検出された 1 号甕棺墓内から、1 面の小型中国鏡（面径 9.5cm）が出土している。透過 X 線画像（図 3）から、飛禽鏡と判断される。飛禽鏡は、上方作系浮彫式獣帯鏡とともに「徐州系」の鏡とも呼ばれ、中国東北地方で製作されたものと考えられている。日本では 15 面前後の出土例が知られているが、前期古墳の副葬品としても出土する一方、北部九州では宮若市汐井掛遺跡 28 号木棺墓〔破鏡〕や朝倉市外之隈遺跡Ⅱ区 1 号墳など、また瀬戸内以東では岡山県宮山墳丘墓や兵庫県若水 A11 号墳など、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の墳墓での出土例が知られており、この時期に流入したことが確実な資料としても注目される。またこの鏡が出土した甕棺墓は糸島地域から筑後川流域でみられる後期系甕棺であり、この点でも北部九州とのつながりのつよさが窺われる。

以上のように、弥生時代後期から終末期にかけて、原の辻遺跡において各種の中国鏡や

弥生時代小形仿製鏡がもたらされていることが確認された。従来から指摘されているように、原の辻遺跡では古墳時代前期以降も集落は継続するものの、前期古墳などの存在が未確認であり、古墳時代以降の鏡などの流入については不明な点が多い。以下では、弥生時代後期の時期を中心に、特に中国鏡の各地への流通のあり方とそこにおける壱岐・原の辻遺跡の位置づけについて考えてみたい。

3. 鏡からみた弥生時代の交流―「水先案内モデル」の観点から―

(1) 壱岐出土鏡はどこからもたらされたか

まず、壱岐・原の辻遺跡から出土した各種の鏡がどこからどのようにもたらされたのかについて考える。多鈕細文鏡については、全体で出土数が少なく、各地域1面前後に限られるため、原の辻遺跡出土鏡についても、北部九州経由でもたらされた可能性とともに、朝鮮半島から独自に流入して保有された可能性も想定される。その後、前述のように、楽浪郡が設置されると、前漢鏡や後漢鏡は楽浪郡から北部九州にもたらされたと考えられる。中期後半以降では、より大陸・半島に近い対馬・壱岐・唐津平野の順で出土量が多いといったあり方ではなく、一貫して鏡の出土は質・量ともに糸島地域・福岡平野が中心である。壱岐から出土した中国鏡の中には、独自の対外交流にもとづき入手されたものが含まれている可能性もあるが、破鏡の出土が北部九州を中心とすること、壱岐においても出土する弥生時代小形仿製鏡の製作地が福岡平野と想定されることからも、壱岐出土中国鏡の中には、糸島地域や福岡平野など、北部九州からもたらされたものが高い割合で含まれていると考えられる。

(2) 弥生時代後期における中国鏡の拡散と「水先案内モデル」

最後に、弥生時代の地域間交流に際して、壱岐の人びとが果たした役割について、鏡の流通という観点から考えてみたい。前述のように、弥生時代後期後半以降になると、各種の中国鏡が西日本から東海にかけて広く拡散する。この背後にある人びとが鏡を求める動きを考えた場合に、どのようなイメージが描けるだろうか。ここで注目されるのは、先に挙げた飛禽鏡などのように弥生時代終末期の遺跡からの出土数が少ない鏡が、北部九州だけでなく、瀬戸内以東でも出土している点である。こうした瀬戸内以東での中国鏡の出土について、各地域がそれぞれに使節を楽浪郡や帯方郡に派遣して、独自に鏡を入手したことが想定される場合もあるが、それ以外に考えられるのは、北部九州の地域集団を介して鏡が入手されたという可能性である。鉄素材の入手をめぐって行われる朝鮮半島南部の三韓地域との日常的な交易や、楽浪系土器の各地での出土という観点からも、弥生時代の西日本における地域間交流において北部九州の海人集団や海村を介した交易が占める比重は大きかったものと考えられる（武末 2009・2016）。筆者はそうした北部九州の海人集団に注目しながら、弥生時代後期～終末期の中国鏡の流通に関して、大きく2つの可能性を想定している。一つは、瀬戸内以東の各地域集団が、北部九州に使者を派遣して、北部九州

で中国鏡を入手した後、各地に持ち帰るものである（辻田 2019: 図 4 左）。もう一つは、瀬戸内以東の各地域集団が、それぞれに使者を派遣し、北部九州の海人集団を水先案内人として、楽浪郡・帯方郡へ使節団として赴いて鏡を入手した後、各地に持ち帰るというものである（図 4 右）。後者を特に「水先案内モデル」と呼んでいる。両者のどちらの場合も存在したと考えられるが、この時期における「原の辻 = 三雲貿易」と呼ばれる楽浪郡・帯方郡と朝鮮半島南部、そして北部九州をつなぐ交易ルートの存在（久住 2007 ; 宮崎 2012）とも重なるものであり、またその中で中国鏡を求めて楽浪郡・帯方郡まで航海を行う上では、北部九州の海人集団の介在は不可欠であったものと考えられる。「原の辻 = 三雲貿易」の名称にもみられるように、土器などからみても壱岐の原の辻遺跡と糸島地域とのつながりは非常に強く、北部九州と朝鮮半島南部、そして楽浪郡・帯方郡へと至るルートの結節点であったことを示している。原の辻遺跡出土鏡は、こうした交流の中でもたらされたものであり、また各地域との同時代的なつながりを示していると考えられるのである。

4. 結語

以上、原の辻遺跡から出土した鏡の検討を通じて、弥生時代の交流のあり方について考えてきた。中国鏡や弥生時代小形仿製鏡の流通から想定されるのは、北部九州とのつながりの強さと、それを媒介としながら朝鮮半島南部や楽浪郡・帯方郡へとつながる交易ルートの存在、また西日本各地の地域集団との直接的・間接的なつながりの存在である。この時期の鏡の各地への流通が、海を介した人びとの交流の結果として生み出されたものであること、その結節点として原の辻遺跡が果たした役割の大きさを再度強調しておきたい。

本発表の準備に際しまして、下記の皆様には大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます（五十音順、敬称略）。

片多雅樹、白石渓冴、武末純一、田中聡一、寺田正剛、中野真澄、松見裕二、壱岐市教育委員会、長崎県埋蔵文化財センター

【主要参考文献】

・壱岐市教育委員会　2021 『小場遺跡（一般農道拡張に伴う緊急調査）；原の辻遺跡（筒城深江線道路拡張に伴う緊急調査）』壱岐市文化財報告書第 31 集
・久住猛雄　2007 「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』53-4
・高倉洋彰　1990 『日本金属器出現期の研究』、学生社
・武末純一　2009 「三韓と倭の交流―海村の視点から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』151
・武末純一　2016 「日本列島の楽浪系土器概観」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』、長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 18 集
・田尻義了　2012 『弥生時代の青銅器生産体制』、九州大学出版会
・辻田淳一郎　2019 『鏡の古代史』、角川選書
・長崎県教育委員会　1999 『原の辻遺跡』、原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 11 集
・長崎県教育委員会　2005 『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』、原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 30 集
・長崎県教育委員会　2016 『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』、長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 18 集
・宮崎貴夫　2012 「「南北市糴」考」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院

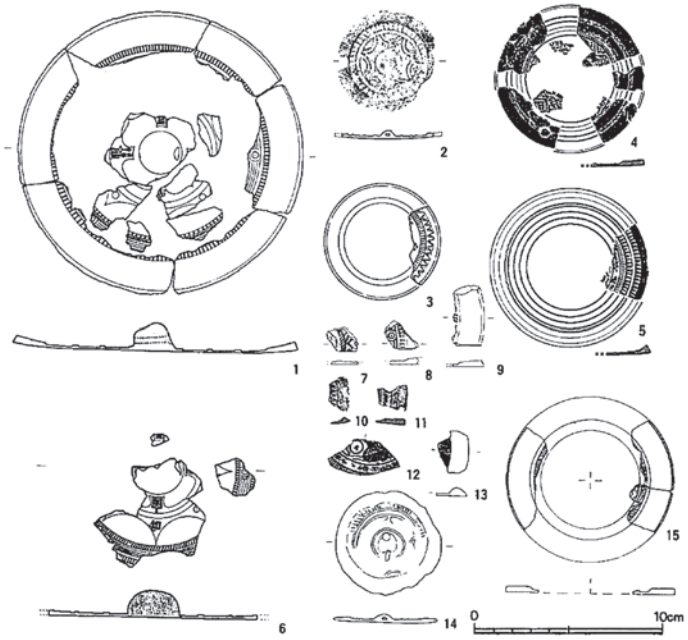


図 1　原の辻遺跡出土鏡①（S=1/4）

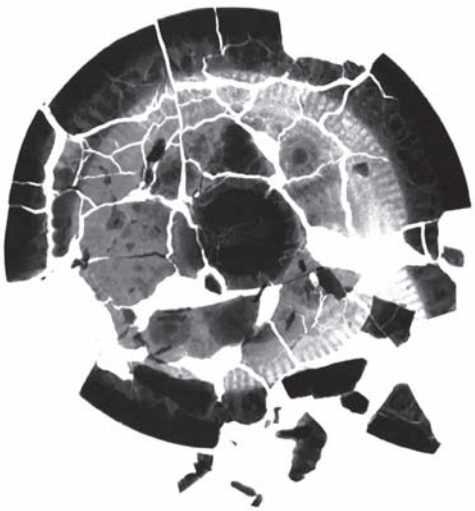


図 3　原の辻遺跡出土鏡③
（壱岐市教育委員会所蔵；
長崎県埋蔵文化財センター撮影、
C-1 区出土鏡）

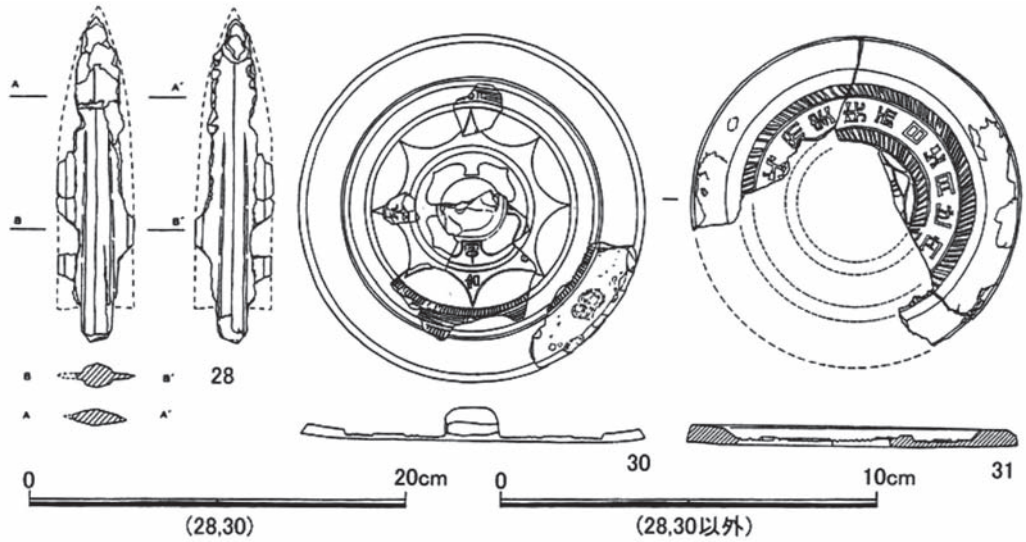


図 2　原の辻遺跡出土鏡②（28, 30：S=1/4, 31：S=1/2）

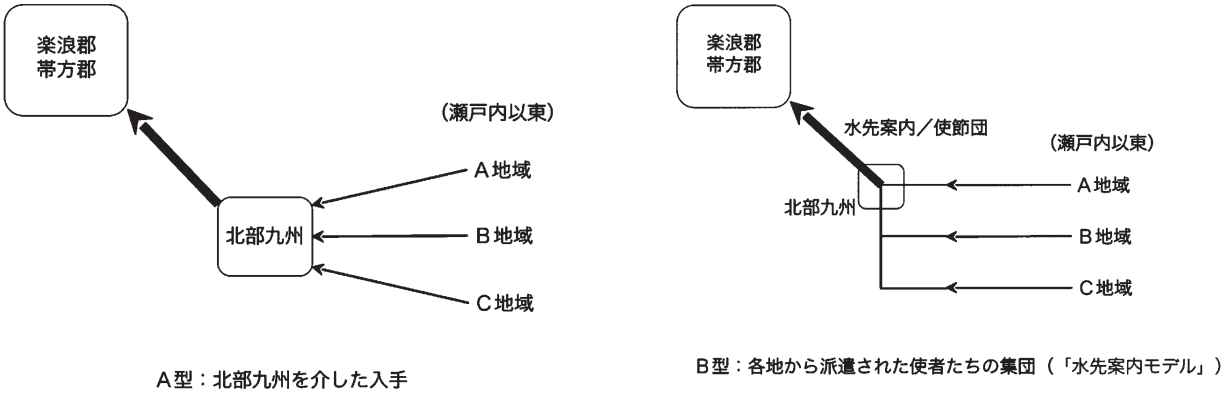


図 4　弥生時代後期後半おける北部九州を結節点とした鏡流入形態の模式図（辻田 2019）

韓半島出土馬形青銅装飾に関する検討

釜山博物館福泉分館学芸研究士
洪　性栗

1. はじめに

馬は古くより人間に飼いならされ共に生きてきた身近な動物である。また機動力を示す代表的な動物として狩猟、戦争、物資移送など実用的な価値も持っている動物である。このような身近さと原動力を同時に持つ特徴により、多様な遺物に馬の姿を見出せる。特に、馬形帯鉤のように装飾を通して人間の政治的・社会的位置を表現する手段としても活用されている。韓半島では永川漁隠洞で 1918 年に馬形青銅装飾が初めて発見されて以来、発掘調査を通して全 5 点の馬形装飾が確認されている。本稿では 5 点の馬形青銅装飾について検討し、同様に馬が表現された伝良洞里馬形剣把頭飾についても合わせて見てみようと思う。

2. 韓半島出土馬形青銅装飾

(1) 永川漁隠洞出土品

1918 年、洪水のため土砂が崩壊した場所で多量の青銅器とともに偶然発見され、遺構の形態は確認されていないが、土坑墓の系統と推定される。漢鏡 3 点、仿製鏡 12 点、動物形帯鉤 2 点、鹿頭装飾、銅釦 120 点余りとともに発見された。馬の長さは 5.4cm で、馬の胸から尻まで穿孔されている。銅剣などの武器類は一点も出土していないが、このような組み合わせは周辺近隣地域で確認された似た時期の青銅器の組み合わせとは異なるものである。後述する林堂 A-1-34 号出土品が剣把頭飾と結合して出土した事例から、剣把頭飾の一部と推定する。しかし、武器類が確認されておらず、形態的に最も類似して見える陽地里と新西洞出土品が剣把頭飾ではなく装飾品と見られる点で、漁隠洞出土品も穴を使用して着用した装飾具であったと思われる。

(2) 慶山林堂 A-1-34 号甕棺墓

長卵形甕と瓦質短頸壺を使用した三韓時代の合口式甕棺墓で出土した。巾着袋形壺 1 点、鉄環 1 点、ガラス玉とともに出土しており、馬形青銅装飾は剣把頭飾の溝に尾を結合した状態で出土した。馬の右側の前足が若干欠失しており、胸から尾まで穿孔されている。馬の足は内側に集まっている形態で、尾は剣把頭飾の溝への結合を容易にするように端部が厚い。馬の長さは 3.5cm、高さは 2.2cm である。

(3) 慶山陽地里 1 号木棺墓

慶山陽地里 1 号木棺墓は丸太棺を使用して築造した墓である。土器は短頸壺、組合式牛角形把手付壺、巾着袋形壺 3 点のみ出土しているが、被葬者の周囲で板状鉄斧・細形銅剣・鉄剣・漆塗剣鞘・漢鏡・扇などが出土し、腰坑で剣把頭飾・漆塗函（はこ）・銅矛・五銖

銭で装飾された漆塗戈鞘など多量の遺物が確認された。馬形青銅装飾は被葬者の胸部から完形で確認された。永川漁隠洞出土品と全体的に形態は類似するが尾の形態に違いがある。胸から尾の下部まで穿孔が確認されるが、報告者は製作時に鋳型に鋳物を注ぐための湯口とした。馬の長さは5cm、幅は3.5cmである。出土位置は銅剣に近いが連結部が確認されておらず、被葬者の首と胸の周辺で出土したことから装飾具として着用された可能性がある。

(4) 慶山大洞57-1番地木槨墓

大部分の馬形青銅装飾は三韓時代の遺構で確認されるが、慶山大洞出土品は三国時代の出土品で、遺構の年代は報告者によると5世紀第3四半期と推定される。主副槨式木槨墓の主槨で出土しており、金銅冠帽、三累環頭大刀、鉸具、鉄矛、鉄斧などが一緒に確認された。出土位置は被葬者の反対側の短壁の土器群付近で出土しており、馬の長さは2.7cm、幅は2.4cmである。その他の馬形青銅器と違って、胸から尻を貫通する孔の存在が確認されていないため、正確な用途を推定することが難しい。

(5) 大邱新西洞10号木棺墓

短頸壺、小甕、円筒形及び円盤形銅器、異形銅器、用途不明銅製品、首飾りと共伴して出土した。胸から尻まで貫通する穿孔があり、尾は分離しているが、報告者は尾を別に製作して孔にはめたと推定している。出土当時、馬の胸と前足を包み込む銅器が結合して出土しており、同じ形態の銅器が2点さらに出土した。馬形装飾の長さは3.5cm、幅は2.8cmである。

(6) 伝良洞里収集品

土砂が崩れて発見された。銅剣 2点、銅矛 2点、方格規矩四神鏡などが一緒に発見されており、遺構は土坑墓と推定される。立柱形剣把頭飾に同一形態の馬形装飾 4個が一体型としてくっついている。全体的な形態は、部分的な剥離はあるが完形で良好である。過去の報告当時から漁隠洞馬形装飾と似たものと把握されていた。しかし、資料が増加した今の視点で見ると、漁隠洞出土品はむしろ陽地里や新西洞出土品と類似し、良洞里剣把頭飾の馬の表現は他の馬形装飾と明確に区分される。良洞里出土品以外の 5点は馬の顔や足を比較的写実的に再現しているが、良洞里出土品は顔と足を短く表現し簡略化している。このような馬は、馬形帯鉤の馬の表現方法とも区分される独特な形態である。馬装飾はそれぞれ長さ3cm、高さ3.5cmで、剣把頭飾の全体の長さは11cm、幅は5cmである。

3. 馬形青銅装飾の用途について

検討した6点の馬形青銅装飾は、良洞里収集品を除いて全て慶山・大邱など慶北地方を中心に出土している。出土時期は慶山大洞出土品のみ三国時代に該当し、全て三韓時代出

土品と思われる。慶山大洞出土品の場合、伝世の可能性もあるが、胸から尾を貫通する孔がないという製作方式の違いを示しており、他の馬形装飾より遅い時期に製作されたものと思われる。

馬形青銅装飾の用途は、剣把頭飾である林堂出土品と、銅器が結合した大邱新西洞出土品のみある程度具体的な使用法の推定が可能で、それ以外の 3 点は未だ正確な用途が分かっていない。用途は胸と尾を貫通している孔と関連づけて考えてみたい。孔は馬形装飾を製作するための湯口と推定されることもある。しかし、大邱新西洞 10 号出土品をみると胸の孔側に銅器が連結して出土しており、銅器の内側に 2 個の棒が横に設置されている。孔にひもを通して棒と結合した可能性がある。同様に、用途が不確実な陽地里・漁隠洞出土品も孔を活用して使用したものと考えられる。漁隠洞では馬形装飾とともに多量の銅釦が出土しており、銅釦の内側に棒が設置されていることから新西洞出土品と同様に使用されたものと思われる。陽地里でも同様に馬形装飾のすぐそばに銅釦 2 点が確認されており、やはり同様の方法で結合された可能性がある。慶山大洞出土品の出土状況はやや異なるが、まず馬形装飾の孔が確認されず、出土位置も被葬者の近くではない反対側の短壁側の土器群内で出土している。このような出土状況から推測すると慶山大洞出土品は出土時期の差異が大きく、出土位置や馬形装飾の構造も異なり被葬者と関連した装飾具というよりは、埋葬過程で何らかの意味を持って埋葬儀礼と関連して供献されたものでないかと思う。

図 1 韓半島出土馬形青銅装飾
1: 永川漁隠洞　2: 林堂 A-1-34 号　3: 慶山陽地里 1 号
4: 慶山大洞 57-1 番地木槨墓　5: 大邱新西洞 10 号木棺墓　6: 伝良洞里収集品

【参考文献】

梅原末治ほか 1925「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」『大正十一年度古跡調査報告二冊』
鄭澄元 1982「慶南地方の青銅器遺跡と遺物」『韓国考古学報第 12 集』
慶尚北道文化財研究院 2011『大邱新西革新都市 B-1 3 北地区遺跡』
韓国文化財財団 2017『2015 年度小規模発掘調査報告書ⅩⅣ —慶北 2—』
国立大邱博物館 2018『琴湖江と道』
聖林文化財研究院 2020『慶山陽地里遺跡』

原の辻遺跡芦辺高原地区出土　馬形青銅製品について
―令和元年度壱岐市教育委員会調査出土新資料―

長崎県埋蔵文化財センター主任文化財保護主事
白石　渓冴

Ⅰ．はじめに

原の辻遺跡は、『魏志倭人伝』に記載される一支国の王都と目されている。これは集落を多重環濠が廻ることや、中国を除く東アジアで最古の「船着き場跡」が見つかっていること、また『魏志倭人伝』に「南北に市糴す」と記載される盛んな交易の実態が、多種多様な青銅器の出土から裏付けられること、これらが根拠となっている（宮﨑 2008）。特に青銅器では、青銅製権（はかり）や車馬具の一部、遼東系銅釧など、日本列島の他の弥生時代遺跡で類例のない、特殊な遺物が検出されることが特徴である。そうした中で、2019 年度に壱岐市教育委員会によって「馬形青銅製品」が検出された（壱岐市教育委員会 2021）。これは日本初の発見である。

この馬形青銅製品について、①まずこの馬形青銅製品自体の分析・観察によって可能な限り「どのようなものであるのか」検討する。②そのうえでおおむね同時代の中国大陸・韓

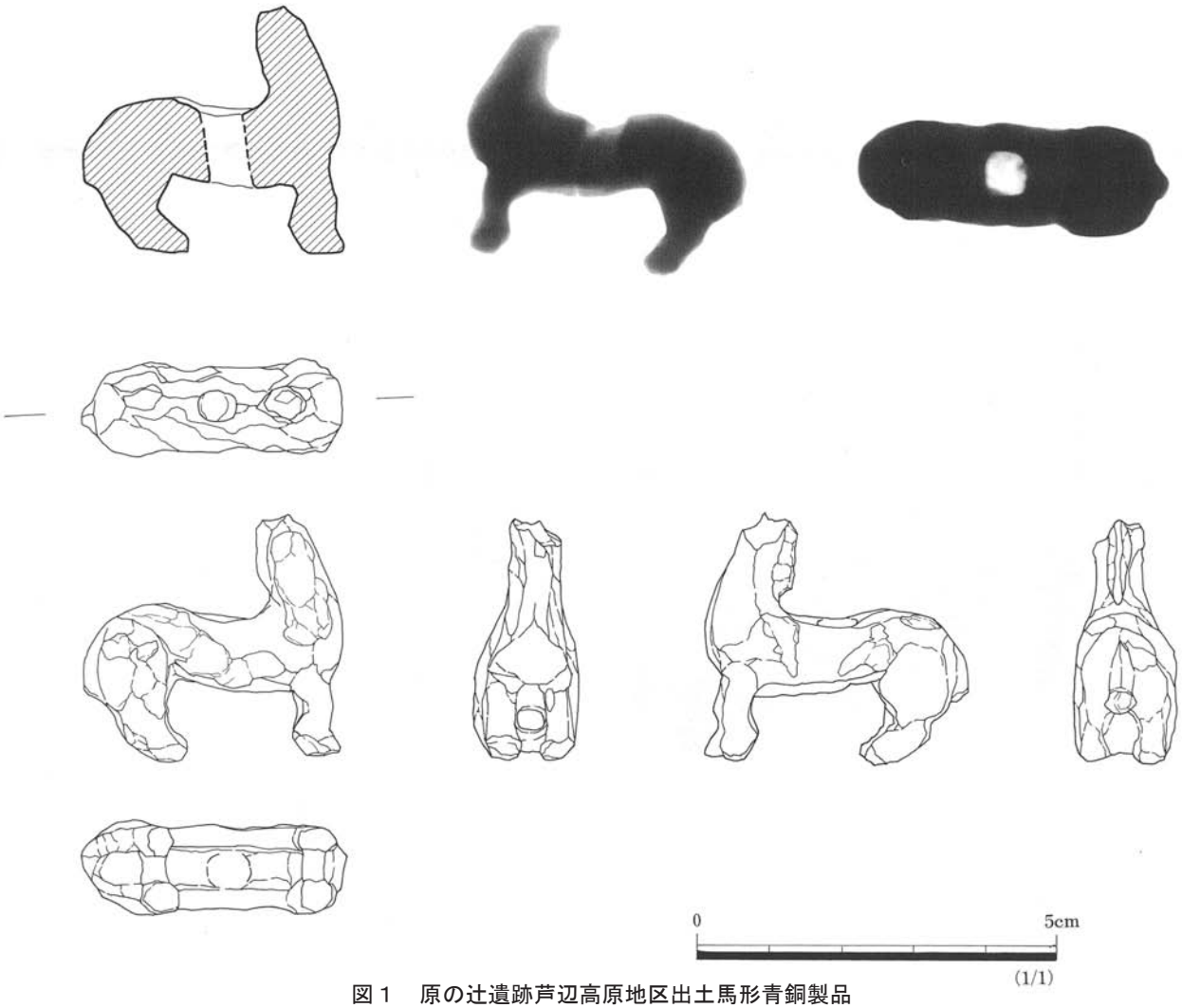


図１　原の辻遺跡芦辺高原地区出土馬形青銅製品

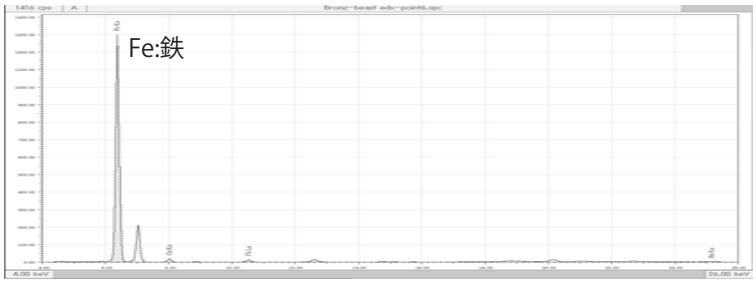


図 2-1　蛍光 X 線分析結果（腹部）

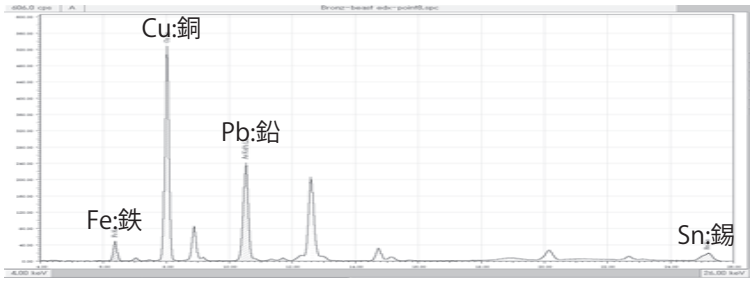


図 2-2　蛍光 X 線分析結果（頸部）

図３　馬形青銅製品出土状況

半島の事例から、この青銅製品がどの地域で生産されたと考えられるのかを明らかにする。③そして、それがどのような歴史的な背景のもと原の辻遺跡にもたらされたのかについて論じる。

Ⅱ．原の辻遺跡出土の馬形青銅製品自体についての分析

１．馬形青銅製品の素材、形、大きさ

動物形の青銅器である。頭部および尻尾部を欠損するが、鬣（たてがみ）と見られる部分が確認されることから、馬を表現したものと考えられる。長さ 3.7cm、残存高 3.5cm、最大幅 1.2cm を測る。腹部と後足の境界に段を持ち、筋肉の盛り上りが写実的に表現されている。首から下には鞍や鐙などは表現されない（巻頭カラー 1-1、図１）。接地部分はおおむね平坦であり自立が可能である。背部から腹部にかけて上下方向（馬の首の傾きとほぼ平行にやや斜め）に、鉄芯が貫通する（図２）（注１）。この部分は現状では隅丸方形に浅く窪んでいる（巻頭カラー 1-2)。また、２本の前脚、後脚はそれぞれ分離しておらず、前脚の間には円形の孔が見られる。孔は不整円形であり、ドリル状の回転による穿孔ではない。ただし、両脚の間や孔の周辺は稜を持たず、ヤスリ状の工具で面取りがなされたものと思われる。(巻頭カラー 1-3)。

２．どのような道具か

青銅器がもっとも発達した中国大陸では、殷・周代から漢代にわたる古銅器は、１食器、２酒器、３水器、４楽器、５雑器、６兵器、７農工具、８車馬具、９度量器、10 銭幣、11 印璽・符節の 11 種類に分類されている（樋口 2011)。馬形青銅製品の使用方法を考えるため消去法により絞り込むと「５雑器」が残る。雑器はさらに「調度」と「服飾」に分類されるが、さらに消去法により「服飾」が残る（注２)。服飾である場合、対象に青銅器を結びつける必要があるが、上述の前脚の間の孔が、この機能を持つと考えられる。以上により装身具であると判断される。

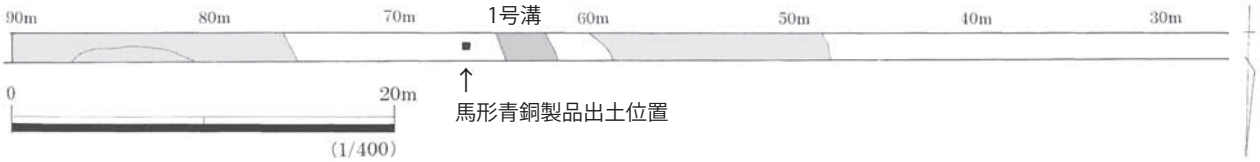


図 4-1　馬形青銅製品出土地周辺遺構配置図

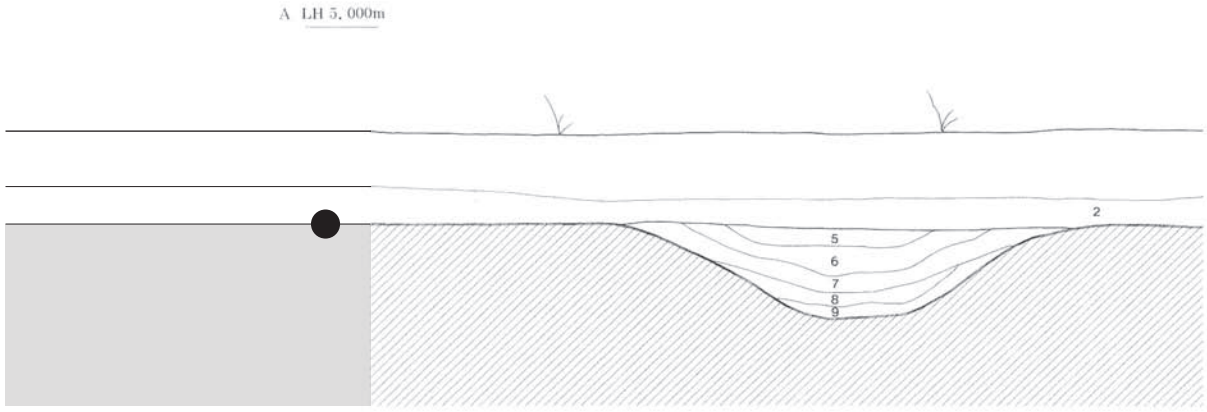


図 4-2　馬形青銅製品出土位置図（土層図）

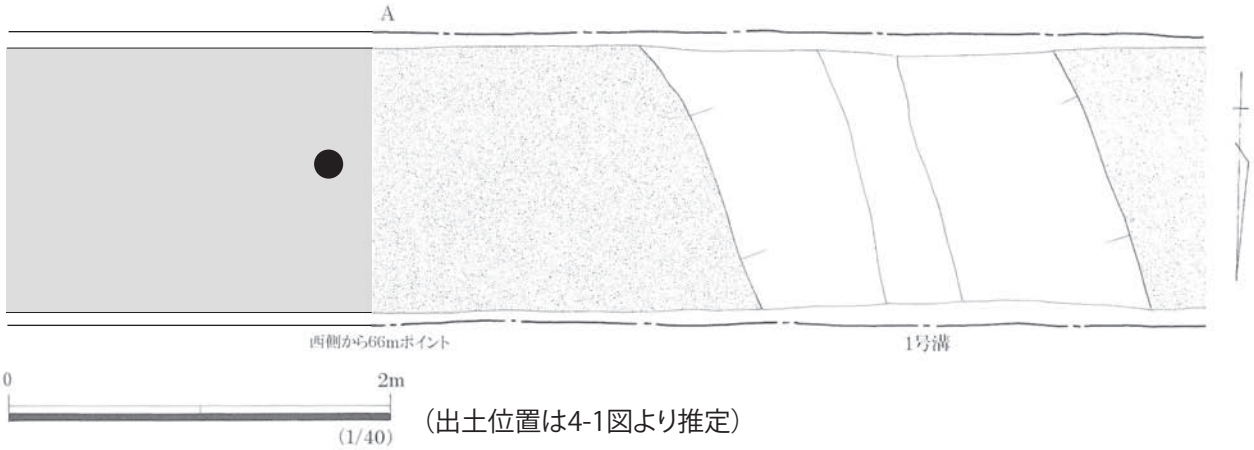


図 4-3　馬形青銅製品出土位置図（平面図）

３．出土状況

近世以降の削平面（地山直上）からの出土である（図３）。地山層と「２層」の間からの出土であり、この「２層」は報告書では「後世の堆積層」と呼ばれている。この「２層」は染付などの近世以降の遺物をわずかに含む大形遺構の上に堆積するため、削平の時期は「近世あるいは近代の可能性がある」とされるにとどまり、馬形青銅製品の年代を出土層位から絞り込むことは難しい。

しかしながら、A：馬形青銅製品が出土した「後世の堆積層」とされる「２層」自体には遺物がほとんど含まれないこと、またB：出土地点から直線距離で2.0m程度の位置に、最下層にて古墳時代前期末（4世紀中葉～後葉）の土師器（図５）を含む溝状遺構（１号溝）が検出されていること、以上A、Bの２点から、馬形青銅製品と１号溝との関連が想定され、弥生時代前期後半から古墳時代前期後半まで（本論においては説明を簡便にするため、以

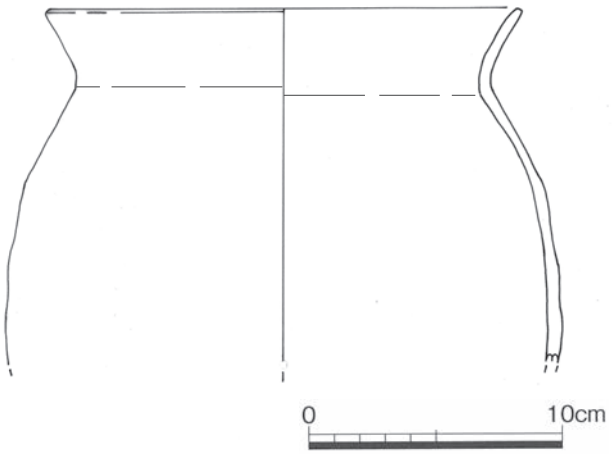


図 5-1　B 区 1 号溝出土土師器（筆者実測）

図 5-2　B 区 1 号溝出土土師器（筆者撮影）
（当該資料は壱岐市教育委員会所蔵）

下「原の辻遺跡の時代」とする。）に関連する遺物であるとする蓋然性が最も高いと判断される。

４．馬形青銅製品はどこで作られたものか

上記のように出土状況から、「原の辻遺跡の時代」の青銅器である。日本列島の縄文・弥生時代には馬が棲息していた可能性は少なく（末崎 2010）、日本列島での馬具の出土は 4 世紀末～ 5 世紀初頭ごろからである（諫早 2018）。また､馬を飼育する牧の経営が始まったのは、5 世紀ごろからとされる（千賀 2001）。このことから、馬を模したと考えられる本青銅製品は、日本列島で製作されたものではないことが分かる（注３）。このため、中国大陸あるいは韓半島で製作されたものであり、日本列島弥生文化社会との交渉により、原の辻遺跡にもたらされたものと判断される。

Ⅲ．馬形青銅製品の類例についての分析

「原の辻遺跡の時代」には中国において、また遅れて朝鮮半島において、馬具などの馬利用の文化の痕跡が存在する。このため、原の辻遺跡出土の馬形青銅製品の製作地を特定するためには、中国大陸と朝鮮半島の類例から探す必要がある（表１）。

１．中国大陸での類例

中国大陸での類例として、陝西省 : 陝西長安洪慶村漢墓出土（119 号墓 : 9）（図６－ア）、四川省:磚室墓出土（五道渠蜀漢墓）（図６－イ）、雲南省木槨墓出土（図６－ウ）、江蘇省:竪穴石槨墓出土（図６－エ）の 4 遺跡５例が挙げられる（注４）。

２．韓半島での類例

韓半島の類例は、陽地里遺跡 1 号木棺墓、永川漁隠洞（埋納遺構か）、大邱新西洞 10 号木棺墓と、慶山林堂 A- Ⅰ -34 号甕棺墓、慶山大洞 57-1 番地木槨墓（注５）といった韓半島南東部の慶北圏（琴湖江流域）において出土している（図７）。

これら韓半島の馬形青銅製品は、孔にヒモを通して、おそらく装飾具として使用されたものであると考えられている。

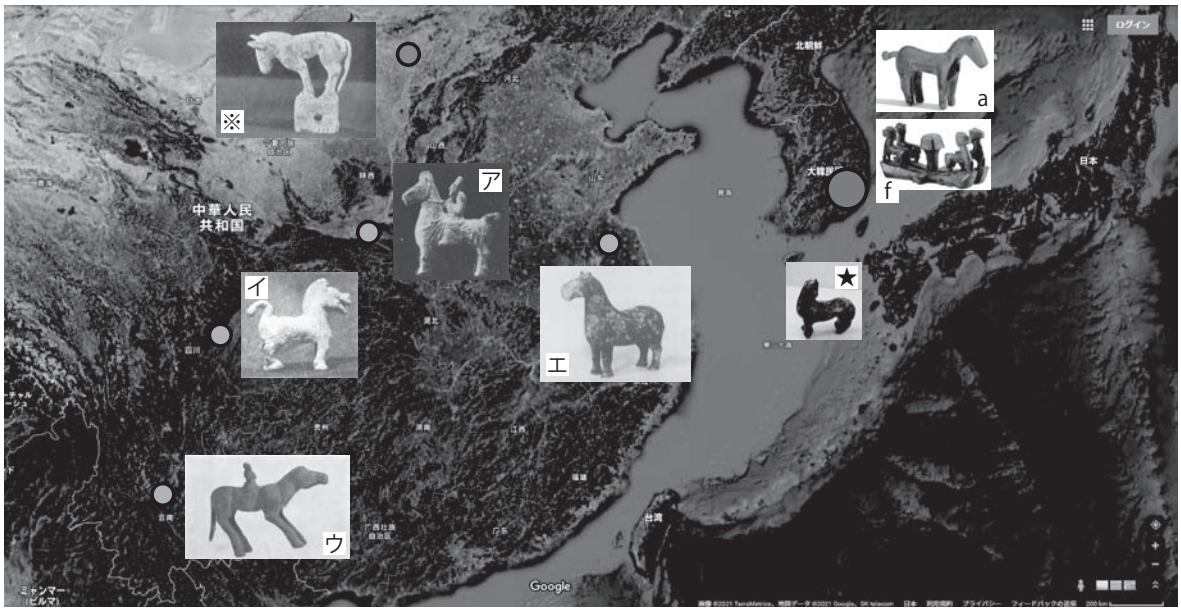


図６　中国大陸・韓半島出土馬形青銅製品の類例（前漢・後漢・三国時代）　（※は参考）

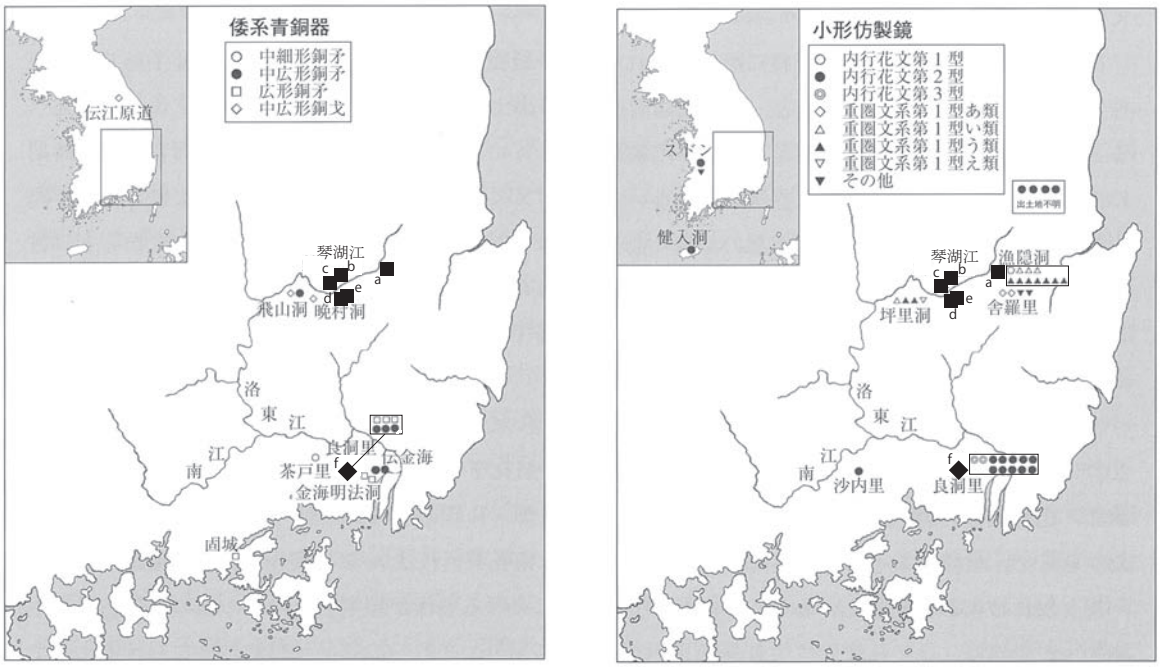


図７　韓半島東南部馬形青銅製品分布図（田尻 2012 より加筆転載）

３．どの地域で製作された遺物か

以上に挙げた類例の中から、形態と法量によって製作地について考える。特に形態については遺物の用途に直接かかわると考えられる、「孔をもつ」という点に着目する。

形態において、馬の体に平行する方向（水平方向）に孔を持つ例は、琴湖江流域の一群に限られる。また法量においても、この一群に含まれる（図８）（注６）。

このことから、原の辻遺跡出土馬形青銅製品の製作地は、韓半島東南部付近であると判断される。ただし原の辻遺跡例が首を持ち上げるのに対して、琴湖江流域の馬形青銅製品は首を直線的にあるいはやや持ち上げる状態であり、全体的な形状が異なる。こうした中で、慶尚南道の金海地域には４体の馬形青銅製品が取り付けられた「馬形把頭飾」があり

（岡内 1973，国立慶州博物館編著 2001）、①首を持ち上げる、②後脚 2 本の臀部の筋肉の膨らみが表現され、後脚が内側によるという点で、形態はこれに最もよく似る（図 9）。このことから韓半島東南部地域、中でも金海地域が生産地である可能性が高いと判断される。

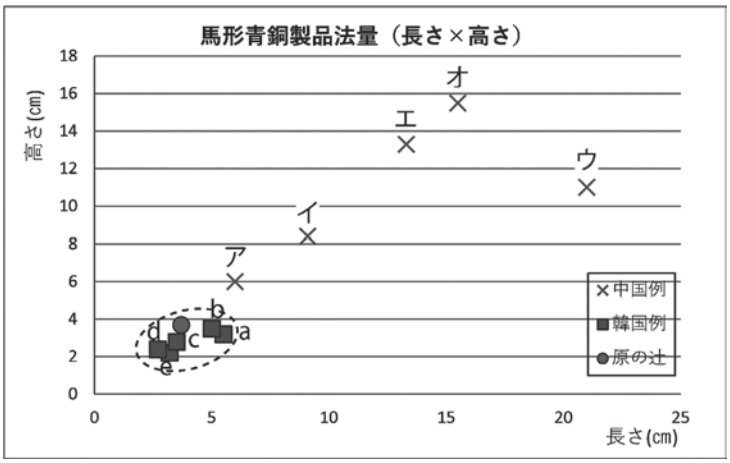


図８　中国大陸・韓半島馬形青銅製品法量散布図

表１　中国大陸・韓半島出土馬形青銅製品の類例（前漢・後漢・三国時代）

	No.	遺跡	遺構	長さ	高さ	備考
中国大陸例	ア	陝西長安 洪慶村漢墓	119号墓（詳細不明）	6	6	人物像 多様な馬具
	イ	四川省 五道渠蜀漢墓	磚室墓	9.1	8.4	馬具なし 嘶く
	ウ	雲南省	木槨墓か？ （石採中発見）	21	11	2点中1点報告 人物像(裸足) 前脚短い。手綱？
	エ	江蘇省1	竪穴積石石槨墓 (木材で蓋と床)	13.3	13.3	オと対。銅車と共伴。 馬車馬か。
	オ	江蘇省2		15.5	15.5	エと対。銅車と共伴。 馬車馬か。

	No.	遺跡	遺構	長さ	高さ	備考
韓半島例	a	永川漁隠洞	木棺墓？ 埋納遺構？	5.5	3.2	胴から臀部に孔。 合型
	b	陽地里	1号木棺墓	5	3.5	胴から臀部に孔。
	c	新西洞10号	木棺墓	3.5	2.8	胴から臀部に孔。 装飾品に付着。
	d	林堂A-Ⅰ-34号	甕棺墓	3.2	2.2	胴から臀部に孔。 把頭飾に付着。
	e	慶山大洞57-1番地	木槨墓	2.7	2.4	孔無し。 5世紀3/4 伝世品か。
	f	伝良洞里※※	土坑墓？ 木棺墓？	(3.3)	(3.2)	孔無し。 頭部に手綱か 頸から下馬具なし
壱岐	★	原の辻遺跡	溝状遺構埋土中？	3.7	3.7	前脚の間に孔。 頸から下馬具なし

※法量（長さ・高さはcm）
※※伝良洞里遺跡出土馬形把頭飾については、
岡内1973中の実測図を用いて馬形意匠一個体について計測した参考値。

Ⅳ．原の辻遺跡出土の馬形青銅製品の年代

上述のように、原の辻遺跡出土の馬形青銅製品は、金海地域にある良洞里遺跡から出土したと伝わる「馬形把頭飾」に最も似ており、ほぼ同時期のものであると考えられる。そこで「馬形把頭飾」の年代を考えることによって、原の辻遺跡出土の馬形青銅製品の年代の絞り込みを目指す。

韓半島出土の把頭飾の編年を行った宮里修は、伝良洞里遺跡出土の馬形把頭飾が立柱形把頭飾に分類されるとし、大きな変化としては、石製から青銅製品という材質転換、実用的なものから視覚的な効果が重視される装飾的なものへという変化の方向の中で、装飾が最も活発に行われる段階（剣把頭飾５段階）に位置づけ、これを細形銅剣が見られる最終段階（銅剣Ⅴ期）のものであるとした（宮里 2009）。この銅剣Ⅴ期の年代については他の研究者との間に見解の相違があるが、把頭飾が材質および形状を変化させていった最終段階の姿であるということについて首肯される。良洞里遺跡 55 号墓では、この段階の粟粒文方柱十字形把頭飾が出土するが、これには小型仿製鏡が共伴する。この小型仿製鏡は田尻義了氏により、「第２型ｂ類」に分類され、福岡市井尻Ｂ遺跡と飯倉Ｄ遺跡での出土状況により弥生時代後期中頃（高三潴式新段階～下大隈式古段階）のものであることが明らかとなっ

ている（田尻 2012）。このことから、宮里の把頭飾編年で５期とされた資料の一部は、弥生時代後期中頃であり、馬形把頭飾の年代も、これに近い時期のものと判断される。そして、この馬形把頭飾に類似する原の辻遺跡出土馬形青銅製品の年代も、この頃であると判断される（注７）。

Ⅴ．馬形青銅製品は、原の辻遺跡にどのようにもたらされたのか

弥生時代の中国大陸、朝鮮半島と日本列島との交易のあり方は武末氏により、三韓土器と楽浪土器の出土点数や集中具合を根拠に、上層（外交交渉（政治的交渉）・中層（楽浪交易）・下層（三韓交易；対馬と対岸の金海地域との日常的な交易）というモデルで説明されている（武末 2009, 2016）。このうち「下層」については、ほぼ対馬においてのみ、金海地域を中心に見られる異型青銅器（双頭管状銅器、角形銅器、笠頭形銅器、有孔十字形銅器、平環）の類似品や、剣付属金具、変形細形銅剣といった青銅器が出土することが、そうした交流を裏付けるものとされている（武末 2018）。上記のように、日本列島で初めて発見された原の辻遺跡出土の馬形青銅製品は、金海地域産である。このことから、本例は「北部九州にはほとんど見られず、対馬に集中して見られる金海地域産の青銅器」というグループに属するもの、ということができる。（注８、９）。

以上より、原の辻遺跡の馬形青銅製品とは、「弥生時代後期中頃（高三潴新段階～下大隈古段階：１世紀後葉～２世紀前半頃）に、金海地域と対馬地域との日常的な交渉（下層の交易）によって、対馬を経由して原の辻遺跡にもたらされた装飾品である」とまとめることができよう（注 10、11）。

そしてこの時期は、原の辻遺跡では、Ⅴ期（第２次盛行期）に含まれ（注 12）、後期初頭のⅣ期（衰退期）を経て（注 13）、環濠の再掘削や丘陵頂部の整備が進み、三韓系・楽浪系の文物が多く流入する時期と考えられている。

北部九州での高三潴古段階から新段階へ移行する時期に、韓半島においては楽浪関連遺物（漢鏡）、韓半島青銅器文化の遺物、および倭系青銅器の分布の中心が、慶尚北道から慶尚南道の金海地域に移動し、さらに紀元 100 年頃に入ると鉄器生産の中心が金海地域にまで広がると考えられている（井上 2010）。

また中国鏡から見ると、「漢委奴国王」の金印の賜与を契機として、中国鏡の流入が再び活発となったと時期であると考えられており（辻田 2019）、原の辻遺跡出土の馬形青銅製品は、こうした時代背景における交流の様相を現すものであると評価できる（注 14）。

結語

以上の分析結果は以下のように整理されよう。

①この青銅製品は、鬣（たてがみ）を持つ特徴から、馬を表現したものと判断される。

②この馬形青銅製品は、前脚の間に不整円形の孔が見られる。

③蛍光Ｘ線分析により、背部から腹部にかけて上下方向に鉄と見られる金属が貫通するこ

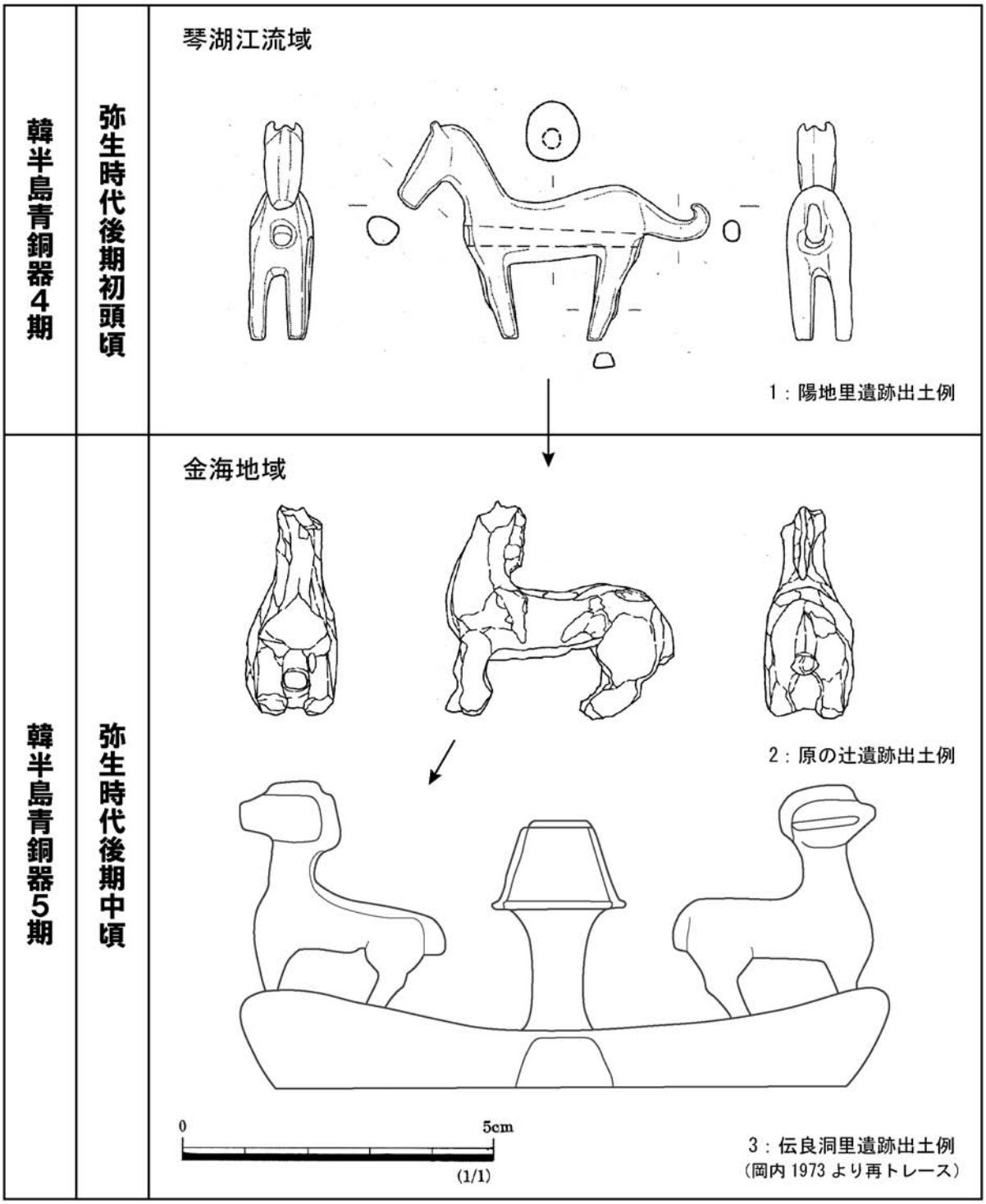


図９　馬形青銅製品編年図

とが判明した。

④殷・周から漢代にかけての中国古銅器の分類によると、「雑器」の「服飾」に分類される。

⑤出土状況から、古墳時代前期後半を下限とする「原の辻遺跡の時代」の遺物である可能性が高い。

⑥この時期に日本列島には馬が棲息しないことから、中国大陸あるいは朝鮮半島で製作されたものである。

⑦馬形青銅器の胴部を貫く、水平方向の孔をもつ特徴は、道具としての使用方法に直結す

ると考えられ、この特徴は、琴湖江流域に分布する馬形青銅製品のグループに同じである。そしてこれらの多くは出土状況から、装飾品であったと考えられている。
⑧長さと高さを計測した法量からも、琴湖江流域の馬形青銅製品のグループに属する。
⑨宮里修氏による把頭飾の編年案によると、伝良洞里遺跡出土の馬形把頭飾は、細形銅剣文化の最終段階（Ｖ期）のものであるとされ、この時期は田尻義了氏の小型仿製鏡の編年によると弥生時代後期中頃（高三潴新段階～下大隈古段階：１世紀後葉～２世紀前半頃）である。このことから、原の辻遺跡の馬形青銅製品の製作年代はおおよそこの頃であると考えられる。
⑩武末氏の「下層（三韓交易；対馬と対岸の金海地域との日常的な交易）」の交易により、弥生時代後期中頃（高三潴新段階～下大隈古段階：１世紀後葉～２世紀前半頃）に、金海地域から対馬を経由して原の辻遺跡にもたらされたと考えられる。

謝辞
本研究にあたり、以下の方々には大変お世話になりました。記して感謝いたします。（五十音順。敬称略） 安海成 金恩瑩 洪性栗 徐光輝 武末純一 田中聡一 辻田淳一郎 中野真澄 松見裕二 松本圭太 三阪一徳 宮本一夫 壱岐市教育委員会 対馬市教育委員会 釜山博物館 釜山博物館福泉分館

【注】

注１）報告では、「X 線による観察では、腹の部分から背の部分にかけて貫通しているのが確認された。しかし、現在は土が詰まっており、現状ではみることができない。」（壱岐市教育委員会 2021）とされたが、貫通部の上面（馬の背中の位置）及び下面（馬の腹部の位置）において、蛍光Ｘ線による分析を行ったところ、鉄が強く検出された。このことから、この馬形青銅製品には、鉄芯が入っていることが確実である。
注２）まずこの馬形青銅製が、何か別の青銅製品から切り離された再加工品であると考える場合、7、9、10 を除く１～６、８、11 について可能性はある。しかし、観察によっても再加工品であるとする根拠は見出しがたく、ここでは現在の姿（使用から廃棄後の姿）により絞り込みを行った。すると、容器である 1、2、3 の他、4、6 ～ 11 についても、これらに分類されるものではないことは明らかであろう。残るのは「5 雑器」であるが、「調度」（てまわりの道具。日常使用する道具・家具など。）であるとするにはあまりに小さいため、「服飾」（衣類と装身具。）が残る。（「調度」「服飾」の説明は、新村出編 1994『広辞苑　第四版』岩波書店による。）
注３）３世紀末に記された『魏志倭人伝』には、「無牛馬虎豹羊鵲：（その地には）牛・馬・虎・豹（ヒョウ）・羊・鵲（じゃく：カササギ）はいない」という記載がある。
注４）中国の類例については、長崎県埋蔵文化財センターの蔵書を用い、『考古』1959 年～ 2018 年、『文物』1957 年～ 2018 年を用いて探索を行った。有名な「汗血馬像」のような写実的で明らかに大形な例は除外し、小型で、前・後脚が短いなど一定程度デフォルメが施されたものを類例であると判断した。この結果、4 遺跡 5 例の馬形の青銅製品が確認された。この中でも、雲南省の中部および東部地区において、遅くとも戦国時代前期に登場し、戦国時代後期から後漢はじめにかけて存在したとされる「滇」という地域には、貯貝器・銅鼓などに人や動物が多く集まる様子を表現した動物形青銅製品が、多数存在する（張増祺 1998）。この地域における類例の探索については、今回は行うことができなかった。このため、類例のリストとしては未完成であることを明記しておく。また内蒙古中南部地域のオルドス高原地域にも、紀元前 4 世紀頃、鹿や羊や馬などをモチーフとした「竿頭飾」という立体獣形飾が分布することが明らかにされているが（宮本 2000）（図 6 の※）、類例とするにはやや古いため対象としなかった。
注５）慶山大洞 57-1 番地木槨墓の馬形青銅製品は、5 世紀第三四半期（三国時代）の墓からの出土であり（洪性栗氏御教示）突出して新しいが、青銅器の副葬事例では、金海良洞里遺跡出土の倭系武器形青銅祭器（広形銅矛）7 点のうち 6 点が三国時代まで伝世されている（武末 2020）などの事例があることから、この馬形青銅製品についても伝世品であると思われる。

注６）この地域は韓半島における「初期馬具」が分布する地域の一つであり（諫早 2018）、これは馬をモチーフとした青銅器が製作されたことの一因と思われる。
注７）a: 琴湖江流域の馬形青銅製品と b: 原の辻遺跡出土の馬形青銅製品、c: 伝良洞里出土の馬形把頭飾の時間的な前後関係について見通しを示したい。まず a の中で漁隠洞遺跡出土例（梅原 1946）を例に挙げると、田尻氏の分類案による重圏文系第 1 型の小型仿製鏡が共伴するので（田尻 2012）、弥生時代後期初頭頃のものであると考えられる。このことから b よりは古い。馬形青銅製品の機能に直結すると考えられる孔に注目すると、a の孔が胴部を貫通する長いものであるのに対して、b は前脚のみであり、c は孔を持たない。装飾品として対象と結びつけるための「孔の退化」という変化の方向が想定され、3 者の関係は a → b → c という見通しが立てられる。また b と c では、胸の筋肉の盛り上がりなど点において前者の方が写実的で、前出的である。琴湖江流域の類例についての型式学的な変化や共伴遺物を用いた検討が必要であるが、上記の変遷を見通しとして提示したい（図９）。
注８）ただしタカマツノダン遺跡やサカドウ遺跡において出土した触角式剣把頭飾や椎ノ浦 1 号石棺で出土した剣把頭飾、塔ノ首 3 号石棺墓から出土した銅釧が、慶尚北道舎羅里 130 号墓出土例に似ることから、慶尚北道地域とも一定の関係があった（武末 2018）ことを明らかにしている。
注９）また同時に、弥生文化期の倭系青銅器および小型仿製鏡が分布する地域でもあるため、この地域との密な交易を裏付ける（図７）（田尻 2012）。
注 10）馬形青銅製品が原の辻遺跡にもたらされた時期については、厳密には弥生時代後期中頃「以降」ということになり、下限をしぼり込むことはできないが、この時期は後述するように原の辻集落において下層の交流が最も活発になった時期に含まれるため、金海地域での長期の伝世期間を経ずに原の辻遺跡にもたらされた可能性が高いものと思われる。
注 11）田尻義了は、倭系青銅器が韓半島で副葬品として検出された事例を集成し、これらの中に製作時期と埋葬時期の差が見られるものがあることを見出している。倭系青銅器の長期間の伝世によると考えられ、こうした事例は列島側の意図とは異なる取扱いによるものであると評価している（田尻 2020）。この例に見られる送りてと受け取りての間の取り扱いの差は、韓半島の青銅器に対する列島側の対応についても同様なことが想定されるため、馬形青銅製品が、弥生時代社会ではたした役割についての評価は、出土状況が分かる類例の検出を待って、検討が必要である。
注 12）原の辻遺跡の歴史的変遷はⅠ期（集落誕生から集落形成期）、Ⅱ期（集落確立期）、Ⅲ期（第 1 次集落盛行期）、Ⅳ期（集落後退期）、Ⅴ期（第 2 次盛行期〔弥生時代後期中葉～後葉〕）、Ⅵ期（解体から終焉期）ととらえられている（壱岐市教育委員会 2015，松見・古澤 2016）。
注 13）原の辻遺跡において、中国や朝鮮半島の集団との交流のために整備されたとされる「船着き場跡」については、筆者により弥生時代中期中葉の後半（須玖Ⅰ式新段階）以降（紀元前 2 世紀後半以降）に造られたことが明らかにされ（白石 2020）、現状では弥生時代後期初頭（紀元前後）には使われなくなったと想定されている（宮﨑 2019）。
注 14）原の辻遺跡出土の馬形青銅製品の胴部を上下に貫く鉄芯について、今回の検討によっては明らかにできなかった。ただし、原の辻遺跡出土例に、伝良洞里遺跡出土の馬形把頭飾の頭部と同じ頭部についていたと仮定することは十分に可能であり、その場合、頭部に手綱が付いていたものと考えられる。そして、同時期の東アジア社会において、乗馬する人物像を表現する青銅器が多く見られることから（図６）、鉄芯は、手綱を握る鉄製人物像を固定するためものであった可能性を指摘しておきたい。さらに鉄製品が用いられた背景には、金海地域において紀元 100 年頃から鉄生産が開始されたとされること（井上 2010）を想定したい。

【引用・参考文献】

日本語

諫早直人 2018「初期馬具の多様性―福岡県御所山古墳出土辻金具の検討―」『日韓交渉の考古学―古墳時代篇―』
壱岐市教育委員会 2015『海の王都・原の辻遺跡と壱岐の至宝』長崎県壱岐市
壱岐市教育委員会 2021『小場遺跡・原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第 31 集
井上主税 2010「勒島遺跡と対外交流」『日韓考古学の新潮流　季刊考古学　第 113 号』雄山閣
岡内三真 1973「＜資料紹介＞金海良洞里遺跡出土遺物について」『史林』56（3）
梅原末治 1946『朝鮮古文化綜鑑　第一巻』養徳社
国立慶州博物館　編著 2001『国立慶州博物館（日本語版）』
末崎真澄 2010「日本の馬文化　人と馬の歴史から」『馬　アジアを駆けた二千年』九州国立博物館
白石渓冴 2020「原の辻遺跡の船着き場跡」『令和 2 年度東アジア国際シンポジウム　土を盛り、石を築く―土木・建築技術にみる東アジア交流―』長崎県埋蔵文化財センター
武末純一 2009「三韓と倭の交流　海村の視点から」『『三国志』魏志倭人伝の国際環境』国立歴史民俗博物館研究報告　第 151 集

武末純一 2016「弥生時代の日韓交流」『平成 28 年度東アジア国際シンポジウム　大海を渡り、一支国に至る。―国境の島、壱岐・原の辻遺跡における日韓交流―』長崎県埋蔵文化財センター
武末純一 2018「南北市糴～対馬にみる日韓交渉～」『倭の境界對馬国』伊都国歴史博物館
武末純一 2020「弥生時代日韓交渉を巡るいくつかの問題―総論に代えて―」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告　論考編）』
田尻義了 2012『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
田尻義了 2020「韓半島の弥生系青銅器―近年の小型仿製鏡の議論を中心に―」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告　論考編）』
千賀久 2001「古墳時代の牧と馬飼集団」『古代の武器・武具・馬具　その変遷と国家成立期における役割　季刊考古学　第 76 号』雄山閣
辻田淳一郎 2019「紀元後一～三世紀の地域間交流と鏡―弥生時代後期～終末期」『鏡の古代史』角川選書
樋口隆康 2011『中国の古銅器』学生社
松見裕二・古澤義久 2016「Ⅵ．総括 2．原の辻遺跡の盛衰」『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県教育委員会
宮﨑貴夫 2008『原の辻遺跡　壱岐に甦る弥生の海の王都』同成社
宮本一夫 2000「オルドス青銅器文化の終焉」『中国古代北疆の考古学的研究』中国書店

中国語

雲南省文物工作隊 1964「雲南祥雲大波那木槨銅棺墓清理報告」『考古』1964-2
四川省文物管理委員会・崇慶県文化館 1984「四川崇慶県五道渠蜀漢墓」『文物』1984-8
陝西省文物管理委員会 1959「陝西長安洪慶村秦漢墓第二次発掘簡記」『考古』1959-12
張増祺 1998『晋寧石寨山』雲南美術出版社
南京博物院 1973「江蘇漣水三里墩西漢墓」『考古』1973-2

韓国語

宮里修 2009「韓半島剣把頭飾の分類と編年」『嶺南考古学』50 号
韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺跡（Ⅰ）A ～ B 地区古墳群』
韓国文化財財団 2017『2015 年度小規模発掘調査報告書ⅩⅣ―慶北 2―』
慶尚北道文化財研究院 2011『大邱新西革新都市 B-1 3 北区域遺跡』
聖林文化財研究院 2020『慶山陽地里遺跡』

追記：脱稿後、武末先生より、シンポジウム当日のディスカッションの議題の一つとして乗馬の風習が当時存在したのかという点について挙げていただいた。それは、筆者が馬形把頭飾からの類推により、原の辻遺跡出土の馬形青銅製品の頭部に手綱を持つとし、更に鉄芯はその手綱を持つ人物像を固定するものと推測したこと（注 14 参照）を受けてである。このことを議論するための資料として、韓半島で製作されたことが確実とされる馬を現した青銅器の例として、漁隠洞遺跡で馬形青銅製品と共伴した馬形帯鉤を提示する（図 10）。また、これに加えて福岡市博物館で 1993 年に開催された『旅順博物館所蔵品展―幻の西域コレクション―』の図録の中で、後漢代の錞于（じゅんう：楽器）の鈕の部分に馬が表現されている例を見つけたので、これも提示する（京都文化博物館・京都新聞社 1992）（図 11）。出土地については、読み取ることはできなかった。

京都文化博物館・京都新聞社 1992『旅順博物館所蔵品展―幻の西域コレクション―』日本写真印刷株式会社

図 10　馬形帯鉤（漁隠洞遺跡出土）（朝鮮古文化綜鑑第一巻より転載）

図 11　錞于（じゅんう：出土地不明）（京都文化博物館・京都新聞社 1992 より転載）

講師プロフィール

たけすえ　じゅんいち
武末　純一

福岡大学名誉教授
春日市奴国の丘歴史資料館名誉館長

1950 年福岡市生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了（韓国・ソウル大学校大学院留学）。北九州市立歴史博物館、北九州市立考古博物館、福岡大学教授を経て現職。現在、九州古文化研究会代表、原の辻遺跡調査指導委員。専門は弥生・古墳時代の日韓交渉考古学と集落構造論。著作に『土器からみた日韓交渉』（学生社、1991 年）、『弥生の村』（山川出版社、2002 年）、「日韓の権」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告書　論考編）』（2020 年）等がある。

つじ た　じゅんいちろう
辻田　淳一郎

九州大学大学院人文科学研究院　准教授

1973 年長崎県生まれ。九州大学大学院比較社会文化研究科単位修得退学。博士（比較社会文化）。専門は弥生・古墳時代の考古学。著作に『鏡と初期ヤマト政権』（すいれん舎、2007 年）、『同型鏡と倭の五王の時代』（同成社、2018 年）、『鏡の古代史』（角川選書、2019 年）等がある。

ホン　ソンユル
洪　性栗

釜山博物館福泉分館　学芸研究士

1986 年韓国釜山市生まれ。釜山大学校大学院考古学科碩士（修士）課程修了。専門は三韓時代の多鈕細文鏡。著作に「多鈕細文鏡の新研究」（釜山大学校碩士学位論文、2015 年、韓国語）、「釜山福泉洞古墳群出土金銅冠の構造と特性」『三国時代金銅冠比較研究』(2020 年、韓国語）がある。

しらいし　けいご
白石　渓冴

長崎県埋蔵文化財センター　主任文化財保護主事

1982 年岐阜県生まれ。九州大学大学院人文科学府修了。専門は東北アジアの先史文化。著作に「遼東地域における商代後期から西周並行期の土器編年」『中国考古学』11（2011 年）、「頭ヶ島白浜遺跡 TP9（第 9 試掘坑）出土遺物」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』5(2015 年)、「原の辻遺跡の船着き場跡」『令和 2 年度東アジア国際シンポジウム　土を盛り、石を築く―土木・建築技術にみる東アジア交流―』（2020 年）がある。

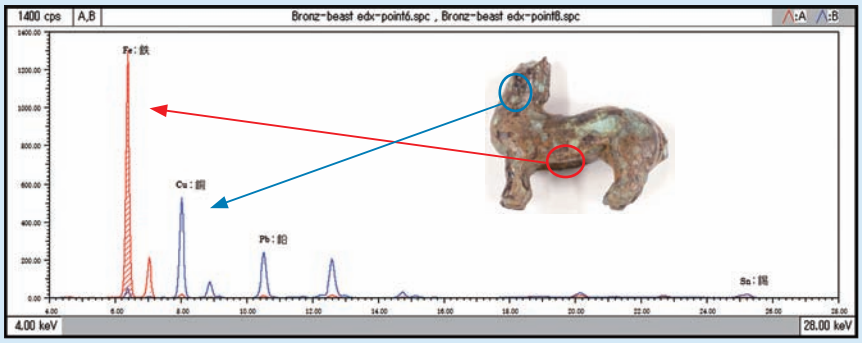
科学トピック
～原の辻遺跡出土『馬形青銅製品』の診察結果～

遺跡から発掘される金属製品の多くは、錆びた状態で出土し、そのまま放っておくとボロボロに崩壊してしまいます。そのため、出土した金属製品は「保存処理＝治療」を施す必要があります。また、適切な保存処理を施すためには資料がどのような材質でできていて、どのくらい劣化しているのかを見定める必要があり、人間の医療と同じく治療の前に「診察＝事前調査」が不可欠です。

壱岐市教育委員会が実施した原の辻遺跡の調査では、４本の脚を有する馬形の金属製品が出土しました。保存処理を施すため長崎県埋蔵文化財センターに搬入され事前調査を実施したところ、大変興味深い診察結果が得られました。まず、資料のレントゲン写真を撮影したところ、背中から腹部にかけて穴が空いていることが分かりました。しかし、表面の錆を取り除きクリーニングを実施しても穴はふさがっていました。次に、蛍光Ｘ線分析装置で元素分析を実施したところ、頸部の分析では「銅（Cu）•鉛（Pb）•錫（Sn）」を検出し、穴がふさがっている腹部付近の分析では「鉄（Fe）」を検出しました。

診察の結果から、本資料は『青銅製』で、背中から腹部にかけて穿孔があり、その穴に鉄の棒のようなものが刺さっていたことが分かりました。この鉄芯がどのような意図で馬形青銅製品に嵌め込まれ、使用されたかは不明ですが、今後の類例の調査などで明らかになることを期待します。

馬形青銅製品のレントゲン写真



馬形青銅製品の蛍光Ｘ線分析結果

青いグラフ：頸部＝銅（Cu）・鉛（Pb）・錫（Sn）、赤いグラフ：腹部＝鉄（Fe）

令和３年度　東アジア国際シンポジウム

光り輝く青銅器を求めて

－原の辻遺跡出土青銅器から見た東アジア交流－

2021（令和３）年 10 月 16 日（土）　長崎歴史文化博物館［1 階ホール］

関連講座：2021（令和３）年 10 月 24 日（日）壱岐市立一支国博物館［3 階多目的ホール］

主催　長崎県埋蔵文化財センター

共催　釜山博物館、長崎歴史文化博物館、壱岐市立一支国博物館

後援　長崎市教育委員会、壱岐市教育委員会、魏志倭人伝のクニグニネットワーク参加自治体・教育委員会（福岡県教育委員会、佐賀県、飯塚市教育委員会、春日市教育委員会、朝倉市教育委員会、糸島市教育委員会、宇美町教育委員会、唐津市教育委員会、神埼市教育委員会、吉野ヶ里町教育委員会、対馬市教育委員会）、長崎新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、壱岐新聞社、壱岐新報社、ＮＨＫ長崎放送局、ＮＢＣ長崎放送、ＫＴＮテレビ長崎、ＮＣＣ長崎文化放送、ＮＩＢ長崎国際テレビ、光ネットワーク（株）壱岐支店